

令和6年度卒業課題研究

Xジェンダーの自己定義における迷いと確立の過程

ー 当事者本人へのインタビュー調査から ー

令和6年12月20日

指導教員 泉啓

岩手県立大学社会福祉学部
人間福祉学科 0262021006番

伊藤芽美

要約

本稿は、4名のXジェンダーを自認する者の語りから、当事者が抱えてきた性別違和の事例とXジェンダーというカテゴリーを知った経緯、そして自己定義・自己理解に至るまでに起きた葛藤や苦難に着目し、その中で曖昧な性自認を持つ自己を確立させてきた過程を考察した。分析の結果、Xジェンダーは「完全に反対の性になりたいとまでは望まない」、トランスジェンダーの下位概念である捉え方がある中、日本独自の概念で未だに知名度が低く、定義も曖昧であることから、Xジェンダーのカテゴリーを用いて自己を表す際に困難が伴っていた。また、性自認と性的指向が混在した状態で自分や他者を解釈する傾向が強いことから、Xジェンダーという性自認の不安定さとそれに対する周囲の理解が不足している点が見られた。Xジェンダーと自己を確定させる大きな要因としては、カミングアウトや自己呈示によって受け入れてもらった経験や自分を言語化することで再定義することができる点、さらに同じ境遇の人々との関わりで共感を得ることによる安心感などがあげられた。そして、Xジェンダーを含める多様な性のあり方を示す性的マイノリティカテゴリーが当事者を混乱させてしまっている現状があることや、多数のカテゴリーを状況によって使い分けるといった実践も見られた。これらの結果は、Xジェンダーという曖昧な性自認のあり方を解釈する際にカテゴリーや集団がどのように機能するかを明らかにし、男女二元論に基づかない性自認に対する理解と知名度が社会的に高まる必要性を示唆している。

目次

要約	1
第1章 序論	2
第1節 研究の目的と背景	2
第2節 Xジェンダー概念のあり方	2
第3節 Xジェンダーの確立	4
第4節 性自認と性的指向	5
第2章 インタビュー調査の概要	6
第1節 調査方法	6
第2節 インタビュー対象者の紹介	7
第3章 結果	10
第1節 性別違和の始まり	10
第2節 迷い	20
第3節 自己定義の確立	29
第4章 結論	39
謝辞	41
【参考文献】	41

第1章 序論

第1節 研究の目的と背景

Xジェンダーとは、「男女どちらでもない、あるいは男女どちらでもある、あるいは性という概念すらもたない性自認をもっており、その性自認が流動することもある人」という属性であり（渡辺 2021:35）、「男」、「女」、「トランスジェンダー」などの既存のカテゴリーには当てはまらなないと、何らかの意味において感じている人たちを表す、性的マイノリティのカテゴリーである（武内 2016:1）。自分の身体の性別に違和感や嫌悪感を抱きながらも、性同一性障害当事者ほど反対の性になりたいとまでは強く望まない状態の人々を指す。また、Xジェンダー当事者は男女二元論に基づかない性自認を持ち、さらには性自認の在り方は同じXジェンダー当事者間でもそれぞれで少しずつ異なっている（山田 2019）。そうした中で武内（2016:2）によれば、当事者はXジェンダーというカテゴリーを得ることにより自己肯定感を得て、集団に属することが可能になっているという。

しかしながら、自らをXジェンダーであると断定する前に、Xジェンダー当事者も自分の性自認の違和感が「思考」か「感覚」か、違いを自分自身へ問いかけることも重要であるとし、「男性/女性らしさを押し付けられたくない」という不満が果たして「性自認」によるものなのか「単なる他者からの強制に対する反発」なのか、見極める必要がある（label X 2016:22）。このように、Xジェンダーは医療的なガイドラインが存在しない上、断定するには自分の意思が特に大きく関わっているカテゴリーであり、普段の日常生活やそこに存在する周囲の声などによって意思が変容していく可能性もあると考えられた。

その一方で性同一性障害について鶴田（2009:178-185）は、メディアなどの影響を受け自分を性同一性障害と思い込んでいる、「なんちゃって」と呼ばれる人々の存在が批判される対象となったことで、本当に自分が性同一性障害なのか、自己定義に迷いが生じている当事者たちについて言及した。このように考えると、男女二元論に基づかないXジェンダーの当事者間やその周囲でも「思い込みなのではないか」という風潮が取り巻いており、自身のあいまいな性自認に確信を持つことが困難になっているのではないかと考えられた。

以上のことから、Xジェンダー当事者は自己定義するにあたり、周囲の声や反応、及び他者との関わりが重視されるといえる。本研究では、Xジェンダー当事者の語りから自身をXジェンダーとカテゴライズするまでの過程において、周囲の「思い込みなのではないか」という偏見をどのように受け止め、それが当事者の性自認の自己定義に及ぼした影響を明らかにすることを目的とする。

第2節 Xジェンダー概念のあり方

Xジェンダーについて、昨今 concepts の立ち位置を述べる。セクシャルマイノリティは従来、大きく分けて四つのカテゴリーで区分されており、自認するジェンダーが女性で性指向が女性に向いている人はlesbian（レズビアン）、その逆はgay（ゲイ）、自認するジェンダ

ーにかかわらず男女両方に性的に惹かれる人をbisexual（バイセクシュアル）、身体的ないし指定されたジェンダーとは別のジェンダーであると自認している人をtransgender（トランスジェンダー）と呼び、それらの頭文字を取ってLGBTという四文字で呼ばれていた。そんな中、近年そこに追加されたのが“Q”と“+”と呼ばれるカテゴリーで、新たに“LGBTQ+”と呼ばれるようになった。“Q”は自分のジェンダーがまだ定まっていないあるいは意図的に定めていない人を呼ぶquestioning（クエスチョニング）ないし、自分のジェンダーが人と違っていていると感じるqueer（クイア）である人を指し、LGBTQ以外のセクシャルマイノリティの概念が“+”と呼ばれる枠に入る。“+”には、性的な欲求を生得的に感じないasexual（アセクシャル）、恋愛感情を感じないaromantic（アロマンティック）、男女どちらの性別でもないと感じるnonbinary（ノンバイナリー）、自分自身がどちらの性別かという感覚が揺れ動くgender-fluid（ジェンダーフルイド）、男女のカテゴリーだけでなくあらゆる人に性的に惹かれる人をpansexual（パンセクシャル）などが当てはまり、「Xジェンダー」もこの“+”に値していると言われている（松本 2021）。

Xジェンダーは男女二元論に基づかない独自の性自認であり、疾患名ではない。下位カテゴリーとして「中性」、「両性」、「無性」、「不定性（性自認が流動する人を指す）」と主に四つに分類され、それらに当てはまらない場合は「その他」とされる。さらに同じカテゴリーであっても、内面の在り方はそれぞれ違うのがXジェンダーの特徴でもあるといえる（label X 2013）。また、Xジェンダーは日本独自の呼称であり、他国で使われる「ノンバイナリー」といったカテゴリーとはほぼ同義であるとされており、本研究におけるインタビューでも多く言及されていた。また、label X（2016:28-30）はXジェンダー当事者が抱えた性別違和の傾向を大きく4つに分けた。一つ目は、「自分が出生時の性別で扱われることに疑問を抱くタイプ」で、身体的性別に基づいた扱われ方をされ、不思議に感じる傾向である。二つ目は「自分が他者と比べて変わっているだけだと思うタイプ」で、性別や性自認を一切意識せず、「自分が少し変わり者なだけ」と感じる傾向。三つ目は「一過性のものだ解釈するタイプ」で、主に思春期の頃、自身が抱いた違和感を「みんなそういうもので、大人になればなくなる」と考えてきた傾向。四つ目は「自分の肉体に嫌悪感をもつタイプ」で、身体が成長する度に嫌悪感が生まれたり、心地が悪かったりする傾向である。また、山田（2019:155-157）は、性別違和を有する者が直面する生きづらさについて、性自認とその身体に反映されている性別の特徴の不一致によって引き起こされる“身体的障害”と、性自認と他者や社会からみなされる自己の性別の不一致によって引き起こされる“社会的障害”という2側面から捉えられることを言及した。これらのように、同じXジェンダーカテゴリーの中でも各個人が直面する違和感や障害は人それぞれで多種多様であり、きっかけも人によって大きく異なる。そのため、Xジェンダー当事者は自身が性的マイノリティだと自覚する時期が比較的遅く、子どもの頃から当たり前だと感じてきた些細なことが、実は自分だけが持ちうる感覚だったと後から気づくということも少なくないと言える。

Xジェンダーは既存のカテゴリーには当てはまらない概念であり、男性か女性といった男女二元論的な性別の感覚を持たない人々（松嶋 2012:188）とされているものの、中にはXジ

エンダーをトランスジェンダー（Transgender）の下位概念とみなす考え方と、トランスジェンダーとは異なる単独の概念であるとみなす考え方とがある（山田 2019:145）。後者は新しい概念として立ち位置を形成しているといえるが、前者はトランスジェンダーの類似概念と捉えられることが多い。武内（2021）の自己呈示に関するインタビュー調査によると、当事者たちは男女に当てはまらないXジェンダー概念を理解してもらうべく、まずは性自認とは異なる性のカテゴリーを用いて親に自己呈示を試み、徐々に説明していく過程を辿っていた。このように、Xジェンダーがトランスジェンダーの下位概念であるということは、トランスジェンダーなど比較的解釈しやすいカテゴリーを例として挙げながら説明することができる。一方で、山田（2019:146）は、Xジェンダーを自称する者がトランスジェンダーに当てはまっているという感覚を必ずしも抱いているわけではないと指摘しており、新たな概念としての社会的確立がより重要だと考えられる。同様に、前述した武内（2021）も、Xジェンダー当事者からカミングアウトを受けた人物がトランスジェンダーを理解しようとする一方で、男女の二値に当てはまらない性自認をもつ者におけるカミングアウトの困難も見出せると指摘した。

このように、先行研究からは曖昧な性自認であるからこそそのカミングアウトの困難さや、社会におけるXジェンダー概念の立ち位置には未だに不確定さが残っていることがわかる。また、性同一性障害といった疾患名ではなく、自己をXジェンダーと考える基準が主に当事者の意識にあることから、自己定義が周囲の声や考えにより左右されやすいという側面を持っていると考えられる。そこで本稿では、Xジェンダー当事者の語りから、自己をXジェンダーと定義するこれまでの過程に着目し、どのような紆余曲折を経て自分を解釈し確立に至ったかを検討していく。

第3節 Xジェンダーの確立

ここでは、第2節でも述べた、Xジェンダーの類似カテゴリー「ノンバイナリー」や、その他の類似概念について述べていく。小野（2022:124）はノンバイナリーを「男性にも女性にも所属しない性自認」とし、前述した通りXジェンダーと定義はよく似ているものであるが、Xジェンダーが日本独自の言葉で近年登場したのに対し、¹ノンバイナリーは諸外国で用いられてきたと言われている。針間（2016:94-102）によると、Xジェンダーは広い意味では「ジェンダー・アイデンティティがわからない」場合や、「ジェンダー・アイデンティティが男女どちらでもある」場合に使われることが多い傾向にあるとしている。また、「ノンバイナリー」の他にも類似概念や言語が存在しており、他国では男女どちらでもないという意味で“a gender（アジェンダー）”と呼ばれることも多いという。しかし、トランスジェンダーなどといった名称と比べ、「アジェンダー」は日本ではあまり広がらず、概念の紹介や理解が十分に成されなかったという。そんな中、日本では同義の意味として「Xジェンダー」という名称で知名度が広がったが、なぜそうなったのかの理由は今のところ不明である

¹ 本研究のインタビューの対象者の語りでもノンバイナリーという言葉は多く登場することから、Xジェンダーの確立にはノンバイナリーが深く関係していると考えたが、直接的な関係性を見つけることはできなかった。

とのことだった。それについて針間は、言葉の響きがわかりやすかったことが日本でXジェンダーが広がったきっかけの一つではないかと考察している。

また、label X (2016:204) によると、Xジェンダーを名乗る人々の中でも、その後、やはり自分は性同一性障害だったと思い直すケースなどもあり、性同一性障害かどうかを見定める猶予期間としてとらえる人もいれば、「身体の治療まで望まない症状の軽い自分が、性同一性障害を名乗るのは、他の性同一性障害の人々に申し訳ない」という考え方から「性同一性障害を名乗りたくても名乗れない」ために、Xジェンダーというカテゴリーを用いる場合もあるという。このことから、Xジェンダーが日本で新たな形として発展した理由の一つとして、山田 (2019:145) が提唱していたようにXジェンダーをトランスジェンダーの下位概念と捉えたとすると、「トランスジェンダーほどではないかもしれない」という曖昧な迷いがある人々を救済する役割があったからなのではないかと考えられた。そのような経緯から、最終的に諸外国が用いる「ノンバイナリー」というカテゴリーと類似する立ち位置にXジェンダーが存在したのではないかと考えられる。以上のことから、本研究ではXジェンダーとノンバイナリーをほぼ同義の言葉・カテゴリー群として述べていくこととする。

ノンバイナリーの他にも、類似概念とされるカテゴリーが諸外国では多く存在する。「ノンバイナリー」が男女のどちらにもとらわれないジェンダーアイデンティティを指しているのに対し、日によってジェンダーアイデンティティが変化する「ジェンダーフルイド」という概念も存在している (Eris Young, 2019:22-25)。「ジェンダー・フルイド」はXジェンダーの中でも「不定性」に特に近い概念であるといえる。また、他にも「ジェンダー・ノンコンフォーミング」といって、ジェンダーアイデンティティとジェンダー表現が社会から期待されているものと異なっている人を指す包括的な言葉も存在している。

性的マイノリティに関するカテゴリーは、LGBTQ+の中でも、Xジェンダーの類似概念とされるものも含めるとかなりの種類が存在しており、区別化や解釈が困難とされる場合もあるが、近年カテゴリーが多く登場している分、利点があることもわかっている。ノンバイナリーでトランスジェンダーを自認しているエリス・ヤング (2019:125) は、状況によってこれらの言葉を使い分けながら体験を語ったという。また、武内 (2021) の研究では、Xジェンダー当事者が性的マイノリティに詳しくない他者への自己呈示を試みる際、あえて別カテゴリーの言葉を用いたり、性自認を表す言語ではなく性的指向を示す言語を用いて説明したりするなど、あえてXジェンダー以外の用語やカテゴリーを使って自己を言い表す傾向が多いことが明らかになっている。このように、必ずしも一つのカテゴリーに属する必要は無いと捉えている人の存在も多く、他者へのカミングアウトや自分の性自認を伝えるなどの状況や相手によって類似概念や下位概念を使い分けている働きも見られた。

第4節 性自認と性的指向

ここで、性自認と性的指向の違いについて改めて説明する。厚生労働省によると、性自認とは、自己の性別についての認識のことをいい、生物学的・身体的な性、出生時の戸籍上の

性と、性自認が一致しない人をトランスジェンダーという。また、身体的な性に違和感を持つ人もいて、このように、身体的な性と性自認が一致せず、困難を抱える場合に対して、医学的な診断の結果、性同一性障害と診断されることがある。一方で、性的指向とは、恋愛又は性愛がいずれの性別を対象とするかをいい、異性を好きになることや同性を好きになること、そして誰にも恋愛感情や性的な感情をもたない人もいる（厚生労働省 2020）。このように、性自認と性的指向は似たようで全く別の概念でありながら、「性的マイノリティ」という言葉で括られている以上、二つの概念を無意識に同じものと捉えているケースも少なくない。武内（2021:104-105）のカミングアウトに関するインタビューでは、当事者が家族にカミングアウトをした際、Xジェンダーという概念を理解できなかった上、「バイセクシュアルってこと？」と性的指向の話題に変わって返されたという。また、同様のインタビューでは他に、自身はFtX（女性からどちらでもない性に移行した人を指す）で恋愛のパートナーがシスジェンダーの男性（生物学的・身体的、性自認が共に男性）という対象者がおり、その人物はパートナーにXジェンダーであることを説明し、「女ができることは自分ではない」という「カミングアウトっぽいこと」をするが、パートナーには性自認が「女」ではないということは伝わらなかった上、さらに「女っぽいこと（化粧など）」を強制されてしまったという。このように、このパートナーは恋愛・性愛の指向性に基づいて親密な関係を築くことから、男性である自分と付き合っている＝性的指向は男性で普通の女性と同じ、だと無意識のうちに解釈してしまっていたのではないかと考えられた。

男女のどちらでもないXジェンダーは中性的な格好あるいは日によって性自認が変わる場合（不定性）は男性寄り女性寄りどちらの格好もありえる、ということから、外見からはわかりづらいことが多く、さらにXジェンダーが理解されにくい概念であることから、周囲は理解しようと歩み寄ろうとするものの、比較的解釈しやすい傾向にある性的指向と結び付けて考え、結果的に性自認と性的指向という本来は別物であるはずの二つの概念が混在しているのではないかと考えられる。本稿ではそのような点にも留意しながら、当事者たちが「性自認」としてXジェンダーである自己を確立させてきたかを検討していく。

第2章 インタビュー調査の概要

第1節 調査方法

本節では、インタビュー調査の概要と分析方針を説明する。本稿は「Xジェンダー」を自認する4名のインタビュー・データを事例として取り上げて分析する。フィールドはXジェンダーのための会員制サークルとし、サークル所属の4名を対象にインタビュー調査を行った。

表1 調査協力者概要

インタビュー参加者（仮名）	年代	性自認
---------------	----	-----

Aさん	30代前半	M t X（両性）
Bさん	30代後半	F t X（両性）
Cさん	20代前半	F t X（無性）
Dさん	20代後半	F t X（両性）

文脈において、男性から女性への越境を意味するMTF（Male to Female）や女性から男性への越境を意味するFTM（Female to Male）といった表現と同様に、男性からどちらでもない性（X）への越境を意味するMTX，女性からどちらでもない性（X）への越境を意味するFTXといった表現を用いる。

この4名は、筆者がXジェンダーのための会員制サークルに連絡を取り、インタビューへの協力のために集まってくださった方々である。2024年の8月頃から11月頃まで二回ずつインタビューを行い、これまでの経験や周囲との付き合いなどの語りを得た。調査協力者には、論文作成の目的と筆者の身分を説明し、答えたくない内容には答えなくてもいいと説明したうえで録音の協力を得た。また筆者は、仮名を用いて匿名性にすること、回答いただいた内容を論文に記載していいか了承を得てから論文にデータを用いること、データの保存の仕方などの倫理的配慮について調査協力者に説明し、同意を得たうえでインタビューを行った。

質問内容は一人ひとり少しずつ異なるが、主に「Xジェンダーの概念や性的マイノリティについて知ってから、自分を自己定義するに至った過程」、そしてその過程の中で「どのような迷いがあったか、またその場合はどのように対応していたか」に着目し、詳しく聞き取った。

第2節 インタビュー対象者の紹介

本節では、今回インタビューに参加してくださった方々について紹介していく。

【Aさんについて】

- ・ M t Xの両性
- ・ 新潟県在住
- ・ 当会員制サークルに所属したのは昨年（2023年）
- ・ 性的指向（恋愛対象）：パンセクシャル
- ・ 中性的かつ対等な接し方を心がけてきた。
- ・ 性同一性障害について知った際「そこまでではない」と感じたことから、性的マイノリティについてさらに調べ続け、Xジェンダーへと辿り着いた。
- ・ 現在、数人と共に音楽活動をしている。
- ・ 比較的オープン（Xジェンダーであることを周囲に伝えている）で、家族の中では父親に

カミングアウト済

・Xジェンダーの自認について「思い込みだ」と考えたことも、周囲から言われたことも無いという。

Aさんは現在30代前半であり、Xジェンダーの中でも両性を自認している。現在は当Xジェンダー会員制サークルに所属しながら、別のところで数人の仲間と音楽活動をしている。

子どもの頃から日常生活の中でわずかに性別違和を感じる機会があったが、明確に性的マイノリティについて意識し始めたのは大人になってからという。周囲の知人・友人と父親にはXジェンダーであることをカミングアウトしており、受け入れてもらっていると語った。

【Bさんについて】

- ・F t Xの両性
- ・東京出身、18歳から10年以上アメリカに留学していた経験がある。
- ・2020年頃に当会員制サークルに所属。
- ・性的指向（恋愛対象）：アセクシャル
- ・子どもの頃、周囲から「お前は女じゃない」と言われたが傷つくこともなく、むしろ嬉しかったという。
- ・男性と結婚しており、現在子どももいる
- ・以前まで、トランスジェンダーの当事者とネット上で関わる機会が何度もあった。
- ・俳優がネット上でトランスジェンダーだとカミングアウトをしていたのを見て、勇気を出して当会員制サークルへの所属を決めたという。明確にXジェンダーであると自認したのは当会員制サークルに所属してから

Bさんは現在30代後半で、男性（アメリカ人）と結婚しており、子どももいる。18歳から10年以上にわたってアメリカに留学していた経験があり、結婚相手の男性ともその際に出会った。また、アメリカで日本でいうXジェンダーとほぼ同義である「ノンバイナリー」というカテゴリーを知り、興味を持つように。

以前から自身の性別違和について考えており、性的マイノリティ当事者たちとネット上などで関わる機会が多かった。しかし、身体的性別が異性（男性）である人物と結婚し子どももいるため、他の当事者に「ノンバイナリー（Xジェンダー）なのに結婚してるって意味がわからない」などといった言葉をかけられたことがあるという。

トランスジェンダーの俳優がネット上でカミングアウトをしたのを見て、日本にある当会員制サークルへの所属を決意。その後当サークルの人々と関わっていくうちに自分の性自認について自己理解が進み、それ以降Xジェンダーと自認した。

【Cさんについて】

- ・F t Xの無性で、トランスジェンダー寄りだと自認している。

- ・関西出身。現在は関東在住
- ・当会員制サークルに所属したのは昨年（2023年）。
- ・子どもの頃、家族に「男女（おとこおんな）」と言われたが、Bさん同様傷つくこともなく、その言葉に納得していたという。
- ・大学時代にLGBTQのサークルに所属し、そこで性的マイノリティについて知り始める。
- ・家族にカミングアウト済みだが、「思い込みではないか」など否定的な反応を受けた経験がある。そのため性自認に自信を持てなくなってしまったが、大学のサークルの仲間などが受け入れてくれた経験を何度も重ね、時間をかけて自己定義するに至った。
- ・恋愛的に惹かれるのは男性で、男性との交際経験もあるが、長く続くことは無かったという。
- ・現在は各地の学校などで性的マイノリティ関連の講習会の講師を務めるなど、積極的に活動している。

Cさんは現在20代前半で、関東で働いている。また、各地の学校などで性的マイノリティに関する講習会の講師を務めることも多く、積極的に活動をしている。

子どもの頃から性別に対する違和感を持ち続けていたが、大学生になってLGBTの四つの性的マイノリティカテゴリーについて知り、関連するサークルにも所属した。その中でさらにXジェンダーを知り、自分はこれかと思うようになる。しかし、家族にそれを打ち明けると「思い込みではないか」などの否定的な反応をされ、性自認やジェンダーアイデンティティについて自信をなくしてしまった。その後、大学のサークル仲間などに打ち明け、受け入れてもらった経験を何度も重ね、時間をかけてやっと自己定義するに至った。

【Dさんについて】

- ・F t Xの両性で、発達障害を抱えている。
- ・東京在住
- ・小学2年生頃から、自分は「性自認について何も考えたことが無かった」と気づく。漠然と「（性別は）真ん中」だと意識していたが、小学5年生の頃、性別（女）らしくない振る舞いをしていたことをきっかけにいじめられた経験がある。
- ・Xジェンダーを自認し始めたのは2011年頃（高校生）。Xジェンダーに関する本を読んだから、Xジェンダーについて考えるようになった。
- ・当会員制サークルに所属したのは2015年頃。
- ・これまで様々な性別の人と交際経験がある。
- ・家族にはカミングアウトをしていないが、それ以外には比較的オープンだという。
- ・現在も自分の性自認について迷うことがあり、その度に調べて自分を再定義するということを繰り返しているという。

Dさんは東京在住で、当会員制サークルに所属したのは2015年頃。家族にはXジェンダーであることをカミングアウトしていないが、それ以外には比較的オープンであるという。また、発達障害を抱えており、複合マイノリティ（複数のマイノリティ属性を持っている人のこと）であることを自認している。

小学生の頃から自身の性別について「真ん中」という感覚を持っていたが、性別（女）らしくない振る舞いをしていたことをきっかけにいじめを受けていた。Xジェンダーを知ったのは、高校生の頃、テレビ番組で紹介されていたXジェンダーをテーマにした書籍がきっかけだった。

これまで様々な性別の人と交際経験があったが、それにより自分の性的指向が結局何なのか迷ったようで、流動的だったのだろうかと言った。今も自分の性自認について迷って調べて再定義して、という過程を繰り返しているという。

第3章 結果

第1節 性別違和の始まり

本章ではインタビュー調査の結果を説明し、まず、性別に違和感を抱き始めたきっかけに焦点を当てる。ここでの語りの傾向として、大きく4つに分けられる。はじめに、対象者が子どもの頃に直面してきた性別にまつわることに関わる環境下での違和感や不思議に思ったことを例に、「性別違和」というものを徐々に理解していった過程を述べていく（1項）。さらにその日常生活での友人や家族など周囲の人々とのやりとりで違和感がより確信に変わってきた（2項）。また、その違和感が積もる一因として、道具や衣類など、「男らしくない」、あるいは「女らしくない」ものを好む傾向にあったというエピソードも多かった（3項）。そして最後に、そこからどのようにXジェンダーという概念と出会い知ったのかを論じる。

1. 子どもの頃に抱いた違和感

本項では、Aさん、Bさん、Dさんの三名の事例を通じて、子どもの頃に抱いた違和感について論じる。三人とも子どもの頃のエピソードやその頃漠然と考えていたことを話したが、性別について深刻に考えてはいなくとも「不思議に思っていた」というような感覚を持っていたことがわかった。はじめに、Aさんは子どもの頃から、「僕」や「俺」などの男らしい一人称を使うことに対して苦手意識があったと言った。

A：Xジェンダーじゃないかっていう風に思うようになったのは、記憶をたどっていくと、大体小学校入るか入らないかぐらいの時に、男性の一人称を使うのがすごく苦手だったっていうのがあって、要は「僕」とか「俺」とか、そういうものが使いづらくて。で、今は「私」という風な言葉、一人称使ってるんです

けど、それが1番しっくりきて、逆に男性ではあるけども完全な男性ではないな
っていうところは昔から持ってたものではありましたね。（中略）

筆者:じゃあ、やっぱりXジェンダーと感じ始めた1番最初のきっかけは、やっぱり一人称の違和感っていうのが大きかったですか。

A:そうですね、一人称の違和感が大きかった。（中略）

Aさんは子どもの頃から日本語特有のいわゆる「男性が使うとされる一人称」を使うことに違和感を抱いていたことが、性別違和に気づくきっかけだったのではと振り返っていた。一人称とジェンダーに関して宮崎（2016:148）は、日本語の多様な一人称に対する解釈とそれをふまえた各個人の一人称の意味の再構成が、支配的なジェンダー言語イデオロギーから完全に自由であるとは言えないと明らかにしていた。これらのことから、日頃の自己表現の一部ともなりうる一人称は、ジェンダーアイデンティティの自覚に大きく影響することがうかがえる。

次に、Bさんの事例を取り上げる。Bさんは「性別が分かれている」ということについて気になっていたという。しかし、そこまで深刻に捉えてはおらず、「不思議に思っていた」という感覚だったと語った。

B:そうですね、なんか元々、結構その、鈍感な性格をしてるのもあって。なんか、明確にその、違和感みたいなのを持ってたっていうのは、なんか、若い時だとなかったんですけども、「後から考えると……」みたいなのがちょっと多かったかなって。（中略）周りと違うことで悩まないタイプだったから、逆にそこまで色々悩んだことはなかったんですよ。でも元々、どちらかと言えばあんまりよく性別が分かれてるっていうこと、ちょっと不思議には思ってたかもしれないですね。（中略）でも、みんなそうしてるから、「とりあえずじゃあ」みたいな感じで。

Bさんは、自身を「鈍感なところがあった」と語っているが、些細な違和感であったが故に、性別違和を自覚する決定打となるような事象は無かったようだった。そのため、自分が気になったことでも深刻に捉えるところまでは繋がらず、「とりあえず周りに合わせておけばいいか」という傾向があったのではと語った。しかし、後にその小さな違和感が積み重なり、過去に直面した疑問を振り返った時に初めて、性別違和として明確な自覚が見え始めるようだった。

次に、Dさんの事例を取り上げる。Dさんは小学2，3年生の頃、「性自認そのものについて考えたことがなかった」と気づいた。そこから、自分の性自認はなんだろうと考えた結果、「なんとなく真ん中」という感覚に落ち着いたという。

D：なんとなく、「自分のそういう自認について何も考えていなかったこと」に気づき始めて、で、どっちかって言ったら真ん中かな、みたいな感覚は小2、小3ぐらいからずっとありまして。そんな感じでずっと過ごしてはいたんですけど、（中略）（小5ぐらいにもなってくると、クラスメイトが）性別相応の振る舞いをし出すじゃないですか、いきなり。（中略）それでよくわかんなくなっていくみたいで（中略）。なんでしょう、気づくものだけが溜まっていく感じで、それは周囲の反応だったり、そういう性別相応の振る舞いを周囲がしているっていう気づきもそうですし。（中略）そういったところで、だんだん違和感が重なっていったのかなと、今考えれば思いますけど。

Dさんは性自認について意識し始めたものの、成長するとともに周囲がそれぞれ性別に沿った振る舞いをしている様子を見て、混乱したと語った。幼少期の頃は男女関係なく遊ぶ子どもが多くても、成長し思春期へとなるにつれて男女の違いというものが見えやすくなった。Dさんが違和感を抱くきっかけの一つだったのだろうと読み取れた。そしてDさんもまた、そういった自分自身に対する疑問と周囲の振る舞い方への疑問を抱いた経験を何度も繰り返していくうちに、違和感が重なったのだと考えていた。

以上のことから、対象者は性別違和に気づくのは比較的遅いものの、「あの時どうして、と感じたことはあった」などという記憶そのものははっきりと残っており、それほど性別違和に関わる違和感は自分の中で処理しきれないほど些細なものだったとしても潜在的に積もり、後から気づくという傾向にあることがわかった。また、このように一見些細なことであるがために、自覚するだけでなく周囲からも自分が抱えてきた違和感に気づいてもらうこともないことから、性別違和＝些細な違和感と結びつけることが困難であったことが読み取れる。また、松本（2021:604）は、性的マイノリティ当事者について自分の困りごとは何なのかははっきりと把握していない、あるいは把握することから積極的に目を背けている人も一定の割合でいることを明らかにしており、曖昧な性自認を持つ当事者は特にこの傾向が強いと考えられる。そして、当事者には子どもながらに、ふとした瞬間に浮かんできた疑問点や習性、考え方が「きっと大人になれば変わるかも」、「大人になればこの違和感の正体がわかるかも」と無意識に期待していた部分もあるのではないかと考えられた。

2. 周囲との関わり

本項では、1項での違和感に加え、さらに周囲とのコミュニケーションの中で印象的だったエピソードや、無意識に避けていた事象などを述べていく。はじめに、BさんCさんの事例を取り上げる。出生時性別付与が女性である二人は子どもの頃、周囲から「女捨ててる」、「男女（おとこおんな）」と言われたりからかわれたりすることがあったが、そのようなことを言われても傷つかず、むしろしっくりきていた感覚があったと語った。

B：別に男性でも女性でもないとかどちらでもないというよりも、そこにその境目があるかもちょっとよくわかってないみたいな感じ。だからといって女性っていうカテゴリーにまとめられること自体が嫌かという、別にそうでもないし。そういう意味ではそこに嫌だと思える気持ちが少なかったんで、昔は気づかなかった。それでも普通に生きてこられた部分はあるのかなと思うんですけど、ただ、なんかやっぱりあんまり女性扱いをされないように、なんかちょっと無意識的に振る舞ってたかもしれないですね。昔から。（中略）

筆者:（中略）女性という風にくくられないようにしていたとお話あったんですけども、具体的にはどういう動きがありましたか。

B：そうですね。なんか意図して女性の括りを避けてたっていうわけではないんですけども、もうちょっと、いわゆるちょっと変わった子みたいに言われるようなポジションの、（中略）（そういうポジション）として生きてる人だと、なんかその、「女を捨ててる」だとか、なんか「こいつは女じゃねえよ」みたいに言ったりとかするじゃないですか。（私は）結構ああいう感じの扱いをされることが多くて、客観的に見たらそれはちょっと失礼なのかもしれないんですけども、個人的にはすごいそれが嬉しかったので、喜んでもっとそういう行動するみたいなことはあったような気がして。なんかそういう、「こいつは女ではない」みたいな、そういうことを言われると、結構喜んでた部分はあるかな。（中略）例えば、高校生の時とかもほら、女の子だと結構なんか足を広げて座るなとか（注意されることが）あるじゃないですか。（中略）（そういう注意をよくされていたから、その度に異性から）「恋愛対象には見れない」とか、そういうことを言われたりするのが嬉しくて、もっともっとそういうことをやっていたような節はあるかなっていうのは思います。

筆者:「女じゃねえよ」とか、そういう言葉って傍から見たら結構ひどい言葉だなみたいな風潮はあると思うんですけど、特に向こうが悪ノリみたいな感じだったとしても、そんなぐさりという風には来ないし、なんなら全然気楽なところがあったっていうような感じですかね。

B：そうですね、「ぐさり」どころか、すごい嬉しくなって……（中略）

Bさんは、昔から元々男女の境目についてよくわかっていなかったと語った。だからといって、女性であることにそこまでの嫌悪感は抱かなかったことから、「普通に生きてきた」という。しかし、当時を振り返ってみると、周囲から「女性じゃない」、「恋愛対象ではない」という反応をもらえることに喜んでいたという。意図せずともそのように思われるため

にあえて「女らしくない」行動を試みることが多かったとしており、「恋愛対象には見れない」と思われることを望んでいた。また、label X (2016:28-30) が述べた、大きく四つに分けられるXジェンダー当事者の性別違和の傾向に当てはめると、Bさんは過去まで「自分が他者と比べて変わっているだけだと思うタイプ」であったのではないかと考えられる。

また、CさんもBさんと似たような経験があり、身近な人に「男女（おとこおんな）」と言われた際、自分の中で腑に落ちた感覚があったと語った。

C：これは差別用語なんですけど、ある方、きょうだいに当たる人に、「あなたってなんか女っていうよりかは男女（おとこおんな）だよな」っていうのを言われて、ただ、その時にものすごくしっくり来たんですよ。そうだな、みたいな。

Cさん自身も、このとき言われた言葉が客観的に見て「差別用語である」と認識してはいたものの、自分が言われた際は傷つくこともなく、むしろ「しっくり来た」と語った。家族というとても身近だった存在から言われ、傷つくと思っていたがそこまでショックを受けなかったという自分に対する驚きもあったようにもみえる。また、家族がCさんにそのように言ったのは、Cさんの振る舞いや一般的に男性が選ぶような物などを好む傾向（3項参照）を見てきたからなのではないかと考えられる。

BさんもCさんも、一般的に否定的ととれるような言葉に対してショックを受けたりすることはなかったようだった。むしろ、その言葉を受けたことで自分のジェンダーアイデンティティを見出したようにも思える。しかしながら、BさんもCさんも語りの中であったように、自分の中で傷つくことはなかったものの、そのような言葉たちが「失礼な言葉」や「差別用語」だと理解していた節がある。このように、本人たちも客観的に見れば悪口に値する言葉であるとわかってはいたはずなのに、なぜか自分は傷つかなかった（むしろ嬉しかったり、しっくり来ていたり）、という正体不明の矛盾のような結果が、違和感に繋がったように考えられた。

しかしながら、一方で周囲からの反応が重荷となっていたケースもあった。Dさんは、周囲から女性らしさや振る舞い方を強制され自分のあり方に疑問が生じ、それが精神的ストレスとなって重なってしまったと語った。

筆者:身体的な性別や求められる社会的な役割というか、周りから求められる姿とかについて、これちょっとおかしくない？みたいな違和感を抱いたことやエピソードはありましたか。

D：ありましたね、結構。（中略）性別に関わらずですけど、女性的な振る舞いを求められることが多かったなど。（中略）女性は女性らしくいなさいみたいな、そういった感じの雰囲気。そういったのを求められていたのかなど。あと、（中学生ぐらいは特に）自分がそういった求められているものに過剰に適応し始めて

いた時でもあったので、それにだんだん疲れてきて、高校の時に人間関係で、距離感がバグった事件があって。そこでちょっとこう、心身に支障をきたすようになり、「なんだろう自分って……」みたいな感じになって、セクシャリティのことに行きついたというか。

Dさんの語りの中の「距離感がバグった事件」というのは、女性の友人とのトラブルのことを指している。Dさんはそういったトラブルが起きてしまった要因の一つとして、周囲からの期待や求められる姿が苦であり、疲弊してしまったこともあると語った。また、当時のDさんが思春期であったこともあり、周囲からの女性らしくいるように強いられる環境により過敏に反応してしまったこともうかがえる。さらに、Dさんは1項での語りであったように、「周囲が性別相応の振る舞いをしていた」という性別の境界線を意識せざるを得ない状況に直面してしまったことも重なり、心身ともに疲労がたまってしまったという。このことから、label X (2016:28-30) が述べた、大きく四つに分けられるXジェンダー当事者の性別違和の傾向に当てはめると、Dさんは「自分が出生時の性別で扱われることに疑問を抱くタイプ」であったと考えられ、その疑問に対して、Dさんの中でストレスや疲労が溜まっていたのだと読み取れる。この状況から脱するべく、辿り着いたのがセクシャリティ関連の言葉だったようだった。これは、武内 (2016:2) が明らかにした、「当事者がXジェンダーというカテゴリーを得ることで、規範から距離をとって自己肯定感を得ること」を可能にしていることに関連して、曖昧な性自認であるが故に「何者でもない」と感じた当事者が、セクシャリティ関連のカテゴリーの多数ある中から自分を表す言葉や概念を見つけることによって安心感を得ようとする働きから、性的マイノリティカテゴリーは当事者たちの一種の居場所を表しているように考えられた。

以上のことから、男女二元論に基づく生活基盤やコミュニケーション、先入観がXジェンダー当事者に与える影響について、自己を的確に表す語彙を得たという成果もあれば、当事者の苦しみが徐々に明確になっていくという負の側面もあることがいえる。さらに、思春期が重なる小学生～高校生の頃に感じたストレスやかけられた言葉は特に影響力を持っているようで、周囲も思春期を経てそれぞれが男性らしく/女性らしくなっていく姿を身近に感じることで、自分のジェンダーアイデンティティに少しずつ疑問を持ち始めていく様子が読み取れた。

3. 好みの種類

本項では、性別違和が積もる一因として語られた、「好み」に関して述べていく。例えば、男の子なら青色や戦隊ものなど一般的に「かっこいいもの」を好み、女の子ならピンク色やぬいぐるみやドレスなど一般的に「かわいいもの」を好む、とよく聞く。反対のものを好むと、「らしくないね」などと言われる。そのように好みは「男らしさ」、「女らしさ」に直結しやすいと考えられる。さらに渡辺 (2021:35-36) は、Xジェンダーなどの性的マイノリティ当事者を含めすべての人が自分の着たいファッションをできる状況にはまだ至っていない

いとし、多様な性のあり方を服装で表現しようとする人を受け入れる社会が必要であると言及した。このように、「好きなもの」を手に入れたりありのまま使用したりすることは性別関係なく自分を表現する方法の一つにもなりえるといえる。

そんな中、Cさんは学生時代、自分の好みと周囲の女子生徒たちが一般的に好むものが違うことに気づき、困惑したと語った。

C：自分が違和感を感じ始めたのはちょうど中学生あたりで。例えば、陸上やってたんですけど、陸上の靴のスパイクの入れ物あって、自分これがいいって思って買ったスパイクのケースが、なんか男のものってされるもんだっらしくて、他の方に「それ使ってるのか」みたいな感じの視線を送られた時とか。（中略）中学生の時はいわゆるイケメンと呼ばれる人たちの雑誌があってそれを見せられるんですけど、（中略）雑誌を広げて、この人かっこいいとか、なんかこの人いいみたいな感じで話が盛り上がるんですけど、あれがなんで盛り上がるのかがわからなかった。ちょっと話題についていけないって思う部分もありました。

Cさんは中学生の頃、学生時代に部活で必要だったスパイク用のシューズケースを購入する際、一般的に「男子らしい」ものを好んで選ぶとそれを他の人に気にされたという。当時、Cさんは今よりも性別違和に明確に気づいていない頃だったそうだが、純粋に自分がいいと思ったものを選んだだけに「それ使ってるのか」という視線が送られた際に違和感があったと語った。Cさんは私に「性別に関する違和感を抱いたきっかけは何か」と質問された際、最初にこの出来事について話した。それだけ、この時の周囲の反応がCさんの中で印象深く残っているとうかがえる。また、周囲の女子が好きな男性アイドルや俳優の話題に盛り上がっている中、自分だけ理解や共感ができず、なかなかついていけなかった経験があり、それも性別違和に気づくきっかけの一つだったという。

次にAさんの事例を取り上げる。Aさんは服装に関して、大人になってから「自分の好み」と向き合う機会ができたと言っており、そこでも違和感を覚えた経験があったという。

A：ちょうどその違和感がピークに達したのがちょうど去年とか一昨年末ぐらいだったかで、服に違和感を持ち始めたのがやっぱり大きなきっかけでしたね。今まで私、就職するのがすごい遅かったんで、それまでは家族からの服をまず着て、それでいいや、って思ったんですけど、自分で働くようになってから自分で服を買うようになって、そこで服に違和感を持ち始めて。果たして今まで周りから「これがいい」という風に言われて勧められてきた服が、果たして自分の中で合ってるのかっていうところを疑うようになってきて。（中略）

Aさんは自分で服を購入する際になって初めて自分の好みについて深く考えるようになり、周りが勧めてきた服装と自分が本当に着たい服装が一致していないことに気づいたという。

Aさんはこの時のことを、性別違和のピークだったと語っており、自分の好みの傾向が出生時性別付与である男性らしさに重なっているわけではないと感じたようだった。しかし、「この服は絶対に着たくない」といった嫌悪感が大きかったわけでもないことがうかがえる。このようなことから、Xジェンダー当事者の、「今まで気づくはずだったのに気づかなかった」という些細な違和感であるが故の自認を自覚する遅さが特徴の一つであるといえる。

また、再びCさんの事例を取り上げる。以上の被服体験にまつわる話について、後日、Cさんも似たような経験を語っていた。

C：大学生になってから（制服がなくなった分）、自分で服を選ぶっていうことが圧倒的に多くなったので、その関係上、最初はいわゆるフェミニンな（女性らしい）服を選んでたんですよ。自分がそれが好きだからそれを選ぶっていうのが最初はあったんですけど、だんだん着るのが嫌になってしまって、着るのが嫌になったのは、なんか、なんて言えばいいんですかね、フェミニンな服よりも、いわゆるメンズファッションの方で並んでいる服の方がカッコいいなって思いだして、で、自分はそっちの服を着ていきたいなって思ったんですけど、いわゆるメンズの方の服を選ぶ際に、まずメンズのコーナーに行くことが怖かったです。ここに女性は立ち入っちゃダメなんじゃないだろうかっていうのを、周りをきょろきょろさせながら選んでたっていう覚えがあります。（中略）それで自分自身がそのメンズファッションをした際に、メンズファッションをしてるのに、胸部の部分がなんか丸みを帯びてるっていう気持ち悪さが出始めて。で、1回、東京でそのメンズファッションで歩いていた時に、知らない人に「お前なんて中途半端な格好してるんだ」って怒鳴られたことがある。

CさんもAさんと同様に、初めは出生時の性別に基づいた服装をしていたことにそこまでの嫌悪感は無かったという。しかし、徐々に女性らしい服装に対する違和感や不快感に加え、被服体験がきっかけで自身が抱く身体的嫌悪感に気づいたという。ここでは、潜在的に違和感が積もっていたようにも捉えられ、label X (2016:28-30) が述べた、大きく四つに分けられるXジェンダー当事者の性別違和の傾向に当てはめると、「自分の肉体に嫌悪感をもつタイプ」で身体が成長する度に嫌悪感が生まれたり、心地が悪かったりする傾向があったと考えられる。そんな中、メンズファッションに惹かれ、自分はこっちが着たい、と自覚するようになるが、メンズコーナーに行くことがいけないことなのではないかという不安を募らせながら服を購入していたと振り返っていた。しかし、メンズファッションをしていた中、見知らぬ人物から「中途半端な格好だ」と突然言われた心無い言葉が残した衝撃は大きかったという。現在、Cさんはいわゆるメンズファッションで生活していることが多く、今はもう「中途半端な格好」と言われることは無くなったそうだが、それでも自身の身体に対する嫌悪感はまだにあるようだった。

被服体験や自身が使用する道具のデザインの選択で、自分の中の性別違和に気づき始めた

体験を聞くことができた。今回は主に服装に関する自己表現が中心だったが、他にも好みに関して様々な自己表現方法がある。例えば近年は、ランドセルの色が数年前と比べて何色も展開されており、性別による色の固定概念を見直すような働きが期待されていると考えられる。しかし、トランスジェンダーの当事者なども含め、AさんやCさんのように、初めは周囲が勧めてきたものや自分でも気づかずに使用していたものが後から違和感や嫌悪感が徐々に現れ始めるといった、曖昧で些細であるが故に自己表現が困難とされる人々も、自分らしい服装や好みを主張できる環境に至っていないのが現状であるといえる。

4. Xジェンダーとの出会い

本項では、性別違和が確信へと変わっていく中、どのようにXジェンダーと出会い、自分の中で解釈しようとしていたのかについて述べていく。Xジェンダーは前述した通り、性的マイノリティのカテゴリーの中でも比較的新しく、武内（2021）のインタビュー調査でも社会でのXジェンダーの知名度や理解度の低さがうかがえる。そんな中、対象者たちはどのように「Xジェンダー」というカテゴリーに出会い、受け入れようとしていたのかに注目した。

まず、Aさんの事例を取り上げる。Aさんは、性同一性障害について調べた際に「そこまでではない」と感じたことから「Xジェンダー」に辿り着いたと語った。

A：ただそれでも1回は、トランスジェンダー的な部分ももちろん疑ってはいたんですけど、完全にその反対の性別に行くかっていうとそうでもないし、かと言って、自分は完全な今の割り当てられた性別っていうわけでもないし、「じゃあどっちなんだろう」、みたいなところから探っていって、Xジェンダーというところに行き着いたという形ですね。

Aさんはトランスジェンダーの概念から性的マイノリティを知り、Xジェンダーに出会ったと語った。このように考えてみると、Xジェンダー概念の中には、トランスジェンダーの「そこまでではない」という下位概念として重なる類似点が存在していると捉えられる。トランスジェンダーでもない、だけど自分が出生時の性別通りであるとも思わない、そんな曖昧な感覚の的を射たような概念が、AさんにとってXジェンダーであったことが読み取れる。しかし、全てのXジェンダーがそうとは限らず、Xジェンダーの位置づけをトランスジェンダーの尺度だけでは表しきれないことに留意する必要がある。

次に、Cさんの事例を取り上げる。Cさんは大学生になって初めて、「Xジェンダー」を知ったという。

C：大学生になって初めてLGBTという言葉に出会ってから、LGBTって最初4つしかないと思ってたんですけど、勉強するにつれて、Xジェンダーもあるんだっていうのに大学1年生の頃に気づいて。その中のXジェンダーっていくつかカ

テゴライズされてますけど、無性が1番近いなって。(中略)(その中だったら)いわゆる男性、女性どちらにも当てはまらないっていう感覚が1番近いなって思ってます。

CさんもAさんと同様に、LGBTという従来あった4つの枠から性的マイノリティを知り、やがてXジェンダー概念へと辿り着いたようだった。そしてそこからさらにXジェンダーの中のカテゴリーである「無性」に出会い、「これが自分に近い」と捉えたことが始まりだったと語った。

AさんとCさんは性的マイノリティカテゴリーの大枠とも捉えられるようなLGBTという存在からXジェンダーを知ったという経緯があったが、その一方で、Xジェンダーという言葉がメディアで紹介されていた本を読んで知った経緯を持つのがDさんだった。

D：きっかけは、当時放送されていた休日のそういうバラエティ番組、今も放送されてるんですけど、そのバラエティ番組の中の、こう、ブックコーナーっていう本の紹介のコーナーがあって、そこで紹介されていた小説で知りました。

その本は、性の多様化を表した「ハコブネ」(村田沙耶香氏著)という作品で、今よりもXジェンダーを含む曖昧な性自認や多様な性的指向について知名度が低かった当時で見ると、かなり衝撃とインパクトを残したとして紹介されていた。Dさんはその番組の紹介を見て興味を持ち、読んだ際に自分のジェンダーアイデンティティと曖昧な性自認について、改めて向き合えたという。特に、Dさんは本に登場した、曖昧な性自認の当事者であるキャラクターの心境や言動、生き方を見て、「自分と同じだ」と感じたと言った。ここで初めて、男女二元論に基づかない性自認やそのカテゴリー、概念の存在に気づいた。

また、アメリカに10年以上留学していた経験を持つBさんは、そこで「ノンバイナリー」というXジェンダーとほぼ同義とされる海外の概念に出会ったという。第1章の第3節でも述べたように、Xジェンダーとノンバイナリーの直接的な関連性について見出すことはできなかったが、本研究ではこれらの二つをほぼ同義の言葉として使用していくこととする。

B：アメリカにずっと住んでたんですけど、元々、Xジェンダーより、「ノンバイナリー」という言葉の方が先に知って、なんか、「へー」みたいな感じではあったんですけど、最初は逆にそうじゃない人の方が多いんだって、ちょっとびっくりみたいな……(中略)ただ、よくよく調べると、自分はもう完全にそういう感じ(ノンバイナリー)じゃないかみたいに思ったのがあって……(中略)

Bさんはアメリカ在住時、先にノンバイナリーを知った。それを知った際は、自分事とはあまり思わず、そこまで深く捉えていなかったようだが、「逆にそうじゃない人」、つまり曖昧な性自認ではなく男女のどちらかを明確に自認している人の方が多いことを改めて知り、

驚いたという。それから詳しく調べてみたら、自分はノンバイナリーなのではないかと気づき始めた。

DさんとBさんの二人は、初めから比較的新しく今よりも認知度が低い、「Xジェンダー」や「ノンバイナリー」という概念に出会っていた。AさんとCさんの二人と比べると、この二人は性的マイノリティの大枠からカテゴリーを知ったのではなく、直接的に「曖昧な性自認」の存在を知り、そこから興味を持ち始め、「自分に当てはまる感覚があった」という。

以上の四名の語りを踏まえると、Xジェンダーとの出会い方には大きく分けて二つのきっかけがあるように見える。一つ目はAさんとCさんのように、「トランスジェンダーほどではない」というトランスジェンダーの下位概念としての認識や、LGBTの大枠から性的マイノリティを知ったことが興味の入り口となって、試行錯誤しながらXジェンダーへと辿り着いた、といったパターン。そして二つ目はBさんやDさんのように、初めから新たな概念としてXジェンダー（ノンバイナリー）へと辿り着き、徐々に自分の中で解釈を広げていくパターンである。このように、山田（2019:145）が言及したXジェンダーの捉え方について、「トランスジェンダーの下位概念」であるか、「トランスジェンダーとは異なる単独の概念」であるかという二種類の捉え方は、当事者たちがXジェンダーを知る機会にも大きく関わっており、どのようにXジェンダー概念と出会ったかによって当事者の認識に変化が影響するかは今後の課題にもなりうると考えられた。

第2節 迷い

本節では、対象者がXジェンダーに出会ってから自己定義するまでの過程で抱いた「自分は本当にXジェンダーなのか？」という迷いや疑問、動揺について論じる。ここでの傾向としては大きく四つに分けられ、はじめに自分が「性的マイノリティ」であったことへの動揺について述べていく（1項）。また、性的指向が性自認に与えた影響も明らかになった（2項）。そして、対象者がカミングアウトをした際やコミュニティに属した際に受けた周囲の反応や偏見など、やりとりや周囲の様子が自己定義が揺らぐ一因になりうることもわかった（3項）。さらには、性的マイノリティに関するカテゴリーの多様性が与える影響もあった（4項）。

1. 少数派であることへの動揺

本項では、主にAさんとBさんの事例を通じて、「自分が少数派である」と気づいた際の動揺について論じる。第1節では、XジェンダーはトランスジェンダーやLGBTなど男女二元論に基づいた性自認や性的指向の性的マイノリティカテゴリーに比べ、曖昧な定義と些細な違和感の積み重なりにより、自分の性自認が性的マイノリティに関わるカテゴリーの一種だと知るまでに時間がかかる傾向にあることがわかった。また、子どもの頃であれば性自認の曖昧性を理解することはなおさら困難であり、「昔からこれらが普通感覚だと思っていた」というようなことが、実は周りの人たちとは違ったとわかった際に初めて、「あのとき

の違和感の正体はこれだったんだ」とこれまでの生活での疑問の答え合わせが時間差で行われていくように感じられた。

Bさんは、第1節の4項でもあったように、「ノンバイナリー」という表現を知ったことから性自認について考えており、その際に「逆にそうじゃない人が多い」のが驚きだったという。Aさんも同様に、自分が少数派であるとは思っていなかったと語った。

A：それ（自分がXジェンダーだということ）に対するその動揺というか危機感みたいなものはあって。要は自分が今まで持ってた違和感っていうのが、そのXジェンダーという単語とかその用語を通して言語化できたことによって、自分は少数派で淘汰されてしまうんじゃないとか、多数派の人たちから何かしら叩かれる可能性もあるだろうなっていうところの怖さみたいなものはありましたね。（中略）

AさんもBさんも、これまでの自分の中で当たり前だった感覚や考え方が、「実は周りの人はそうじゃない」ということ、そしてそれが少数派であることに動揺したという。Xジェンダーが曖昧な性自認だからこそ、性別違和の感覚まで曖昧かつ自覚できるほど明確なものではないため、当事者たちは正体不明のままの「ずれ」を長年にわたって抱えてきたことがわかる。さらに、それがDさんのような潜在的な精神的疲労に繋がる可能性も示唆される。

また、Aさんはこれまで抱えてきた謎の違和感の正体が「Xジェンダー」というカテゴリーによって言語となって形になったのを見て、「自分が少数派であるが故の恐怖」を感じたと語った。このことから、当事者がXジェンダーというカテゴリーにより、規範から距離をとって自己肯定感を得て、集団に属することが可能になっている（武内 2016）という利点の他にも、当事者によっては「自分が少数派であることの証明」にもなりうるというネガティブな側面もあるといえる。その不安を受け入れることも容易ではないと感じる当事者も存在していることにも、留意していく必要があるといえる。

2. 性自認と性的指向の混在

次に本項では、性自認と性的指向の関連性に関する語りを紹介する。第1章で論じた通り、性自認と性的指向は互いに与える影響は大きいものの、別個の概念である。また、平森ら（2022:20）の研究では性的指向は「決めたくない・決めていない」といったケースなど多様であることから性的指向の複雑さを示唆しており、安易に性自認と同義に捉えることは難しく、当事者を誤って解釈してしまう可能性もあると考えられる。

Bさんの性自認はXジェンダーで、性的指向はアセクシャル（他者に対して性的欲求や恋愛感情を抱かない人を指す）だが、アメリカ留学時代に出会った身体的性別が異性である人物と結婚しており、子どももいる。また、アーティストである宇多田ヒカルも既婚者だが「ノンバイナリーである」と告白している（中日新聞:2021）。そのようなことに対してネット上で、「アセクシャルでノンバイナリー（Xジェンダー）なのに結婚して子どももいるなんて」という声を見かけたことがあると語った。

B：（中略）ただ、元々結構わかりにくいじゃないですか。「え、じゃあなんなの」みたいになりがちじゃないですか、Xジェンダーとかノンバイナリーって。宇多田ヒカルさんがノンバイナリーってカミングアウトしてみたいなのがあったんですけど、あれもネット上だと、「男と結婚までして子供までいるのにノンバイナリーとか意味がわからない」って（言われてて）。（中略）また、自分はXジェンダーだとその「男でもない、女でもない」みたいな説明が結構多いんですけど、実際は男オンリーか女オンリーではないっていうだけで、結構その（性自認の）幅が広いじゃないですか。（中略）「じゃあ何？（Xジェンダーとかノンバイナリーは）女じゃないってことなの？」みたいな。いや、そういうわけではなくてってなると、（周囲は）「さらに意味わかんないよ」みたいになっちゃうじゃないですか。なので、自分でも言葉にしてみると意味が伝わらないのがわかってるので、（性自認について）あんまり言いたくないと思うようになってしまった。だから、どうやってらわかってもらえるのかなみたいなのを、こうしてほしいって言った方がいいのか、こういうのは嫌なのでやめてみたいなのを言った方がうまくいくのかなみたいなのは、ちょっと思ったりはしてますね。

有名人がノンバイナリーだと公言している中で、ネット上のそれに対する批判的な意見は、やはりBさんの目にも留まっており、インパクトを残していたようだった。さらには自分と同じく、宇多田ヒカル氏の結婚もしていて子どももいるという状況に対する意見が多かったことから、まるで自分に言われているかのような感覚に陥ったことだろう。さらには、曖昧な性自認を直接言葉で説明することについて困難を感じており、避けている節があった。そしてBさんは性自認や感覚を説明するよりも、周囲に対する自分の希望をやめてほしいことなど、対応に対する要望を伝えることで自身のアイデンティティを伝えようとした試みがあったという。

また、Bさんは別日でのインタビューでも以下のように語った。

B：結婚しているからみたいなのは、どちらかというと、そうですね。特にその、面と向かって言われるというよりも、そういうことを言う人が多いみたいなの（噂などを聞くことがよくある）。オンラインとかで。あとはやっぱり同じように結婚しているそのノンバイナリーとかXジェンダーの人と話すと、そこが気になる人が多い。（中略）（私は）そういう意味では、（身体的）異性との結婚を法制度利用できてるっていう意味で、特権があるんじゃないかっていう風に思って。それで、そういう自分のステータス（特権）があるのに、自分は（偏見などと言われるのが）嫌ですとかみたいなのを言うっていうことに、ちょっと葛藤がある的な人が結構多いなって。実際にノンバイナリーとかXジェンダーを自認していて異性婚をしている人と話すと、そういう話が出る人が多いなっていうのを感じました。（中略）

だからそういう意味では、ファッションで言ってるんじゃないかみたいに言われがちとか、あとは気にかけてもらえたからわざとそういうこと言ってるんじゃないかみたいな。「目立ちたいだけなんじゃないか」みたいなことを、結構言われがちだったりとか。あとはその、ノンバイナリーとかXジェンダー全体がそう言われがちっていうのはあると思うんですけど、どうせ本気じゃないんだろうみたいな感じのことを結構言われたりとかすると思うんで…（中略）なんかそういうことをコミュニティの中でも言う人がいたりするし、あと、もしそのコミュニティの外の人（理解が浅い人）からだと、やっぱりそのノンバイナリーとかXジェンダーみたいなのが、バイセクシャルとかああいうの（性的指向）と混ざっちゃってるみたいで……（中略）

Bさんの話によると、Bさんを含む異性婚をしているXジェンダー（ノンバイナリー）当事者は、法律上の制度を利用できているという点と一見性別違和とは関係ないような夫婦に見える点から、周囲から「ファッションなのではないか」、「目立ちたいだけで、本気で言っているわけではないのではないか」と思われがちだという。また、無関係の人から言われるだけではなく、同じコミュニティの中でもそのように言う人がいるようだ。Xジェンダーやノンバイナリーなどは曖昧な性自認であるため属性の振り幅が大きく、多様であるはずだが、結婚という法律上の制度を利用できるという点から、否定的な声を受ける現状があるという。また、性的マイノリティに関する知識があまり無いようなコミュニティ外の人には性自認と性的指向を混合させて考えている場合が多く、特に結婚や子どもがいることについて突っ込んでくることもよくあるという。前述した通り、性自認と性的指向は別物であり、さらには個人の事情や過去が関係した上で成り立っている婚姻関係であるはずだが、周囲はその本人の人間関係（主に恋愛関係）を軸に、当事者のセクシャリティ全体を解釈する傾向にあるとうかがえる。

一方でDさんは、性自認と性的指向について以下のように語った。Dさんは、これまでの恋愛経験が自身の性自認に大きく影響していたと振り返っており、それが迷いになっていたこともあったという。

D：（これまで様々な性別の人と付き合って、）結局どのセクシャリティに属するのか、どの性別の人と恋愛したら1番自分がマシっていうか、こう、そういうジェンダーの揺れに溺れることなく恋愛ができるのかがわからなくなっていくたのかもしれないと思うんですけど。（中略）（統計的には女性と付き合うことが多かったから自分はレズビアンであると思ったこともあったが、）必ずしも女性の心で女性を愛してきたわけではなかったのかもしれないと思って。（中略）（私の場合は）男性が女性を見る目みたいな感じになっちゃうんですよ。（中略）それに気づいたのが本当に去年、一昨年ぐらいの話なんですけど、そっから（嫌な気持ちになって）もう女性との恋愛はしていないって感じです。（自分の性的指向は）流動的だった

んでしょうね。

Dさんはこれまで、様々な性別の人と交際してきた経験があるが、結局、自分がどのような性自認でどのような性的指向でこれまで交際してきたのか、わからないと語った。これまで付き合った人の性別（性自認）を統計的に見れば、自身をレズビアンだと考えたときもあったが、レズビアンは性自認と性的指向共に女性である場合を指す。しかしDさんは、性自認が女性である状態で女性を恋愛対象にしていたわけではなく、自身が男性として女性を恋愛対象として見ていたのではないかと振り返った。それからDさんは自分のジェンダーアイデンティティに対して確信が持てなくなり、恋愛に対して後ろ向きになった様子だった。そしてDさんは自身の性的指向を「流動的だったのかもしれない」としている。性自認と性的指向は別物ではあるものの、恋愛そのものが性別・性自認に直結する事象であることが改めて顕著にわかるエピソードだった。

また、Dさんは別日のインタビューでは、ジェンダーアイデンティティの揺れについてこのように語っている。

D：精神的な疲れとか、（中略）あとは、障害とか疾患が原因で精神的なものに出て、恋愛とかでもそういう状態だと揺らぎが発生しやすいっていうのもあるみたいで、「あ、自分だな」って思いながら、（調べているサイトなどを）見てるときもあります。

Dさんは、生活の中で抱える疲労や障害・疾患、恋愛などの人間関係でジェンダーアイデンティティに揺らぎが出ることを自覚している様子だった。また、松本（2021）がセクシャルマイノリティとメンタルヘルスの関連性についてLGBTQ+のメンタルヘルスは一般に損なわれがちであると言及していることから、ストレスとジェンダーアイデンティティは密に関連している部分が多くあることがうかがえる。

BさんとDさんの語りから、他者を解釈する中でその人の恋愛関係や婚姻関係の状況を大きな基準をしている場合が多いこと、そして周囲だけでなく、当事者本人も自身に対して同じようなことをする傾向が多いことが読み取れた。性自認と性的指向は別の概念ではあるが、性別を表す概念であることに変わりはないことから切っても切れないものであり、性自認よりも性的指向の方がその人の恋愛関係などで客観的に目に見える概念であるため、他者の解釈に性的指向が物差しとして使用しやすいのではないかと考えられる。

3. 周囲の反応や様子が与えた影響、世間の目

本項では、対象者とその周囲の反応や声、そして自分の身の回りで起きた出来事や世間の目が与えた影響について論じる。はじめに、Cさんの事例について述べていく。Cさんは家族に性別違和を持っていることをカミングアウトしたが、否定的な反応をされたり、真に受けてもらえなかったりしたという。

C：自分にとってすごく身近な関係に当たる方にカミングアウトした際に、「それはお前の勘違いだろ。」「一時的な感情なんじゃないか」って、だいぶ否定的なことを言われてしまって。（中略）（そういう言葉）に苛まれたことはありましたね。

Cさんは家族に性別違和について打ち明けると、信じてもらうことができず、自身の感覚を否定するような言い方をされてしまったという。その言葉によって、自分の認識に自信を持てなくなってしまった時期があった。

また、Cさんは大学生の頃、男性のパートナーと付き合っていた経験があり、そのパートナーにも自身のことを軽く打ち明けていた。その際、こちらのジェンダーアイデンティティに対して否定的な反応は無かったものの、ライフプランの話題になった際、「しんどかった」と語った。

C：パートナーには、ジェンダーアイデンティティに関して、「男と女、どちらにも属さないんだ」、「自分自身も自分がすごく男だって思っているわけでもない」って言ってたので、それに関しては特に追求するっていうことはあんまりなくて。こちらとしても傷つくっていうこともないので、そこは良かったんですけど、向こうがライフプランを話してくれた際に、「子供が2人欲しい」って言われたんですよ。ちょっとこれ、自分にとっては痛い話で。養子縁組とかで子供が2人欲しいだったらまだわかるんですよ。で、私自身は母親になると、「お母さんなんだからこうでしょ」みたいな感じの、「女なんだから」に類似する「お母さんなんだから」という押し付けが発生すると思ってたので、お母さんというものはあんまりいいイメージがないっていうことを話してたんですね。それに関しては、ちょっとどう反応すればいいかわかんないっていうショックを受けたような顔されて。

家族の否定的な反応に対して、当時のパートナーは否定的な言葉も無く、余計な詮索も無かったため当時のCさんは安堵したようだった。しかし、パートナーの、「将来子どもが2人欲しい」という願望がCさんにとっては痛い話だったという。Cさんは、「お母さんなんだから〇〇しなさい」という周囲からの反応⇨「女なんだから〇〇しなさい」という押し付けになるのではないかと考えており、母親になることにいいイメージを持っていなかったと語った。また、当時のパートナーからそのようなライフプランを話されたことが、Cさんにとって自分が女性であることを強調されているような重荷になってしまったのではないかと考えられる。

そんな中Cさんは、大学3、4年生の頃、Xジェンダーや性別違和を自認した後でありながらも「身体的性別である女性に戻れるかもしれない」と考えたことがあったという。

C：あとは、自分が着物を着るのにすごく抵抗があったんですけど。大学生の後半（3、4年生）あたりは自分がトランスジェンダーであること、ノンバイナリー、Xジェンダーであることっていうことを受け入れられなくて。頑張ったら女の子に戻れるんじゃないかって、試みた時期で。（中略）いわゆるフェミニンな服を頑張って着るっていうことをしばしばやってたんやけど、例えば、赤い着物を友人に着させてもらってそれを着ていた時に、なんだろう、自分のパートナーもそれがすごく似合うとか可愛いとか言ってくれたんですけど、全然嬉しくなくて。なんか、「賞賛されるのってこっちの女らしい格好なんやな」っていうのを感じた時に、（そのパートナーと）長くは付き合えないと、そんな時、思いましたね。

筆者:女の子に戻れるんじゃないかとありましたけど、そう思ったきっかけは、やっぱり周りからの期待というか、世間の目を気にした故の考えだったんですか。

C：自分の場合は2つあるかなって思ってた。1つが、家族からの価値観の押し付けが起きてて、いわゆる女の子は着物を着て喜ぶはずなのに、とか。または、女は結婚して子供産んで幸せになるもんだとか。（中略）あともう1つが、その同性同士の会話についていけないんですよ。「これ、すごく可愛くない？」って服を見せられても、「それは君が可愛いと思うものなんだね」みたいな（ことを思う）。マジでわかんないけど、そういうものなんだね、みたいな。で、あとはなんか子供産みたい、結婚したい、恋愛したい、みたいな感じで盛り上がってる会話についていけない（ことがあった）。

Cさんは、身体的性別である女性に戻れるのではと試みた理由として、「女だから」といった家族からの価値観の押し付けが起きていたこと、そして同性の会話に付いていけなかったことの二つを挙げた。特に、同性同士の会話では服装などの好みの話題だったり、ここでもライフプランの話題が上がったりで、Cさんは共感ができず、自分だけがどうしても理解できないような会話が広げられている感覚に陥ったという。それらのような日々の不満や違和感が重なった結果、自身の持つ性別違和の感覚を受け入れることができず、あえて女性らしい服装を着てみることをしていた。しかし、女性の着物を着る機会で、当時のパートナーから「よく似合う」といった言葉をもらった際、やはり自分が賞賛されるのは女性らしい服装やあり方であることを実感してしまい、その息苦しさ直面したことから当時のパートナーとは長く付き合うことができないと気づいたと語った。松本（2021:604）によると、大学生や社会人（20代や30代）の性的マイノリティ当事者について、子どもの頃と比べて本人による選択の幅も大きく、理解の得られそうな職場や環境を求めて試行錯誤することが可能であることの一方で、性別違和を抑圧し、戸籍の性別の扱いで就労したり、恋愛・結婚をしたりするなどして、「自分の性別違和を治そう」と試みる人も少なくないという。

このように、周囲との関わりから自身の性自認やジェンダーアイデンティティを考え直し

たり、認識に揺れが生じたりするケースはDさんにもあった。Dさんは自身の性自認の流動性について、世間の目を気にしている部分もあるかもしれないと語った。

D：自分の場合はこう、性自認が流動的なのはもちろんあるんですけど、男性・女性を見る視点というか、そういったのが変わってくるなと思ってます。あと、年齢的なものもあるのかなと。例えば、（自分の年齢は20代後半）なんですけど、やっぱりそうすると、結婚適齢期だとか、そういうのをやっぱり考えざるを得ないので、そう考えるとやっぱりそれに（性自認や性的指向が）誘導されてるのかもしれない。（中略）（自分の性自認はもしかして）女性寄りだから、男性と結婚した方がいいんだろうとか、男性と付き合った方がいいんだろうとか、なんかそういったのも含めて、（恋愛対象が）男性に傾きかけることはあります。（中略）世間からのそういう価値観とか、そういう尺度もある。あと最近、自分の中で決定的になったのは、やっぱり同年代ですね。同年代で、結婚、恋愛どうしようみたいな話題が出て、聞かぬない時とか。あとはたまたまなんですけど、今日の夜、ちょっと高校の頃と同窓会があって行くんですけど、その出欠候補の中に、ほとんどの女性が、結婚してるとか子供を産むからとか言ったらかんたらみたいなこと（を欠席理由として）、書いてありまして。そこで半分ショックだったっていうか。（中略）

Dさんは、恋愛関係や自身の精神状況などで性自認に揺れが生じることを自覚しているが、その原因の一つとして、周囲の結婚やそれに関する価値観が大きく関わっていると語った。Dさんは20代後半で、結婚適齢期について考えざるを得ないと話しており、さらには同年代が結婚や出産をし始めていることに焦りを感じ、それに誘導されるように自身の性自認も変わっている気がするという。また、Dさんはインタビュー当日の夜、高校の同窓会に出席する予定だった。しかし、出欠確認の際、ほとんどの女性が結婚していることや子育てで忙しいことを理由に同窓会への欠席を決めていたことを知り、改めて周囲が結婚し始めている現状を目の当たりにし、ショックを受けていた。

このように、周囲の価値観や世間の目を気にした結果、自身の性別違和を抑圧する動きや無意識に「マジョリティ」寄りの自認に流動することがあり、自己定義に時間がかかることや不安定さが残りやすいと言える。

4. 新たな概念・カテゴリーの登場

本項では、性的マイノリティに関わる新たな概念やカテゴリーの登場が与えた影響について述べていく。近年、LGBTという四つのカテゴリーに加え、それらに限定されない、Xジェンダーやその他の概念が含まれたQ+という新たな枠組みが誕生した。それにより性的マイノリティの表現やあり方は幅広くなり、さらには当事者たちが自分自身をより明確にカテゴライズすることを可能にした。そんな中、DさんはXジェンダーというカテゴリーを知って救われた経験や、自分の中で良い変化があったと語った。これは、武内（2016）が明

らかにした、Xジェンダーカテゴリーがもたらす効果の一つであると言える。しかし、それと同時にDさんはその新たなジャンルやカテゴリーが登場したことも、自己定義に揺らぎが生じた理由の一つだと語った。

D：（Xジェンダーを知って救われたことや変化は）ありましたね、結構。やっぱり、よくも悪くも、高校の時のその人間関係バグった事件（女性らしさを強いられ、疲弊したときのこと）がなかったら、自分はセクシャリティにおいてはずっと「マジョリティ」って思ってたところは強かったと思うんですよ。あるいはこう、そういうセクシャルマイノリティとかの人をちょっとけなしていた部分はあったのかなと思います。で、やっぱり自分自身の視点もすごく広がりましたし、この悩みと付き合ってきてもう10年以上経つと思うんですけど、（中略）いろんな世界があるんだなというかもそうだし、人のことに対しても、どんなセクシャリティ持ってもおかしくないよな、みたいな視点で見ることも増えましたし、より自分のことを深く知った感じですね。こう、なんて言うんでしょう、人生の中では本当に避けては通れないライフイベントの1つだったんだなって、今思います。正直。で、後悔はしてないですし、する気もないですし。ただ、こう今度は「それを受け入れてくれる相手はほぼいないんじゃないか」っていうところに行きついちゃってるので、どうやってそれで人間関係築いていくかっていうフェーズになっちゃってるんですけど、複合マイノリティ（複数のマイノリティ属性を持っている人のこと）って生きにくいっていうところに落ち着いちゃうというか。で、セクシャリティやジェンダーの問題でいっちゃうと、最近なんか、アセクシャルとか、なんかデミロマンティック（深い感情的な繋がりや信頼が無ければ恋愛的に惹かれない人）とか、さらに色々（カテゴリーが）増えてるじゃないですか。で、やっぱり、自分自身でもこう、恋愛の形のモヤモヤ、家庭の上でのモヤモヤみたいな、そういったところでは自分デミロマンティックだったんだとか、そんな感じの気づきも増えていっちゃって。（中略）

Dさんは、Xジェンダーというカテゴリーを知ったことで救われた感覚は確かにあったという。Dさんはそれを知ったことで、自分を深く理解できただけでなく他者に対する理解や視点も広がったきっかけになったと捉えていた。そしてDさんはそれを「避けては通れないライフイベントの一つ」と考えており、自分がマイノリティ側だと気づいたことに関して後悔はしていなかった。しかし、それを理解した上で、自分の曖昧な性自認を受け入れてくれる人はいるのかという不安を抱えており、その中で人間関係をどのように築いていくべきかを考えていた。その結果、Dさんは発達障害を抱えていることもあり、複数のマイノリティを抱えていると生きにくいという考えに至るという。そんな息苦しさを覚える中、近年増え続けている様々なマイノリティ関連の用語を知れば知るほど、自分に対して新たな気づきが増え続け、自分を様々な属性に当てはめ始めるとキリが無くなってしまうと語った。

このように、マイノリティ当事者が自己を言語化し、明確に自己理解するために登場したはずのカテゴリーが、あまりにも多すぎるが故にかえって混乱させてしまう事態を招いていると言える。Dさんは新しい言葉を知る度、「自分は結局どれなのか」という気持ちを抱いてしまうという。

Dさんの事例から、複合マイノリティの苦悩と新しい概念の登場が招く混乱について知ることができた。そんな中、様々なところで性的マイノリティに関する講演会の講師をしている、マイノリティカテゴリーに詳しいCさんにも同様に、新しい概念の登場について質問をした。すると、Cさんは選択肢が多いことについて、とある説を聞いたことがあると話した。

筆者:Cさんから見て、新しい概念の誕生と違ってどうお考えですか。

C:そうよね。やっぱりこの分野をやっていると、新しい概念ってじゃんじゃん出てくるねんけど、うちは単純に面白いと思って。(中略)多様な概念がある中で、それはな、悩むと思いますよ。悩むとは思いますが、多分、なんだろうな、ある社会学者の方がおっしゃってたのが、自由は一種の地獄の始まりだっておっしゃって。(中略)それ(選択肢が多いことによって持つ悩みや争い)は地獄と呼べるって言うてる学者さんもいて、そのセクシャリティの選べる自由性というものが、ある意味悩んでしまうという部分を生み出してる可能性はもしかしたらあるかもしれないなって思いながら(筆者の話を)聞いてました。

曖昧な性自認や性的指向を持つ当事者を救済、区別するべく登場した新たな概念について、Cさんは純粋に興味深いと語った。しかし、多様なセクシャリティを選べるその自由度について、Cさんは以前聞いたことがあるという学説を用いて説明してくれた。選択肢が少ない、あるいは無い場合は自分が進むべき道が決まっているという面では楽であるが、選択肢が多い場合だと、多すぎるが故に迷いが生じたり時には争いが起きたりするだろうという説である。Cさんはそれが性的マイノリティに関しても同じことが言えるのではと考えていた。属性の多さに困惑するDさんの悩みも、これに通ずるように思える。

このように、性的マイノリティのカテゴリーには、当事者たちを救済する役割がある反面、枠がありすぎることから、属するカテゴリーがどこなのかかえって迷わせてしまう課題点もあるといえる。

第3節 自己定義の確立

本節では、第2節での迷いを経験しながら、自己定義に至るまでの経緯や対象者たちの実践について論じる。傾向として大きく三つに分けられ、カミングアウトでの肯定体験や他者に説明するうちに言語化された性自認による自分自身の再定義の積み重ねが今の自己定義に繋がったという語りがあった(1項)。そして同じ境遇同士の関わりによって得られた共感

が与えた影響（2項）や、性的マイノリティ関連について引き続き学びながら自己分析を繰り返す傾向も見られた（3項）。また、他者へ自分のセクシャリティを説明する際には、その都度伝わりやすいカテゴリーを選び、あえて自分のカテゴリーを定めていない傾向も見られた（4項）。

1. 肯定体験の積み重ねと再定義

本項では、対象者が受けた肯定体験の積み重ねと自分自身の再定義について論じる。まず、Cさんの事例を取り上げる。Cさんは前述したように家族から否定された経験があったが、肯定してもらった体験を何度も受けて、ようやく自分自身をXジェンダーと定義することができたと語った。

C：ただ、否定的に受け取るのはせいぜい自分にとって家族に当たる人ぐらいで。肯定的に受け取る人の方が多かった。自分がLGBT（Q+）に関するコミュニティといくつもわりかし複数繋いでたってのもあって、大体肯定してくれる。肯定してくれるのにつれて、自分がXジェンダーって名乗っていいんだって感じたり、やっぱりその言葉を使うことによって、（もし誰かに）お前女のくせになって言われても、「いや、うち女じゃないし」って（思える）。

筆者:肯定の声をたくさん重ねていただいて、（自分が）Xジェンダーだっと思っていうようなことですかね。

C：そうですね。「いや、これはやっぱり一時的な感情じゃない」って思いました。

筆者:こう、自信を持って自分のことを理解するのってすごい難しいことだと思ってて、やっぱり結構時間かかったんだろうなっていう風に思いました。（中略）肯定してくれた方々の声って、ご友人とかかなと思うんですけども、どんな方からどういう言葉いただいてきましたか。

C：人によってまちまちなんですけど。なんだろうな、自分が所属していた（LGBTQ+）サークルの人に言った際は、その方々は割とカミングアウトっていうのはしょっちゅう受けている側の人なので、「おお、そうなんだ」ぐらいやってな。特に否定することもなく、あれこれ言うこともなく。で、あとはなんか、いわゆるそのカミングアウトをもう何十人から受けているよっていうような方じゃなくて、0人か、あるいは1人か2人っていう感じの（慣れていない）人にカミングアウトした際は、「ごめん、今まで知らないうちに嫌なこと言ってたかもしれへん」って言われてたかと思います。（中略）

Cさんは、大学時代に所属していたLGBTQ+関連のサークルの仲間などから肯定された経験と、その際にかけられた言葉によって救われてきた様子だった。

そして、Cさんは否定的な反応をしてきた家族に対しては、これ以上理解されなくても良いと考えていた。

筆者:ご家族の方にもうこれ以上理解してもらおうとかは考えなかったですか。

C: うん。考えなかったし、物理的に距離があったので、理解してもらおうと思わなかったです。(中略) (家族以外に対するこれまでのカミングアウトについて) 正直言うと、9割型はほぼほぼ成功に近くって、すんなりと受け入れる方とか、話してくれてありがとうとか、あなたのあり方のままですごくいいと思うよとか。髪型をものすごく短くした際に、めっちゃハンサムやんとか言ってくれる人もいる。肯定的な経験が多かったっていう分、別に話してもいっかっていう。話さずに相手のセクシャリティを勝手に決めつけるっていうこと自体よくないんですけど、そのほとんどの方が無意識にそうやってしまうっていうのをなんとなくでも感じているので、あらかじめ(自身の性自認について)言うしておく。それか、「女の子だったらこういうことしないといけないでしょ」みたいな感じのを喋るような人であっても、(その人が)周りの意見を吸収していく方であれば、「実はちょっとそういう言動、自分にとっては嬉しくなくて」っていうのを話します。それが大体成功なパターンになる。成功なパターンで経験している分、多分うまくいくだろうっていう期待があって話す。まあ、もし万が一うまくいなくても、職場とかだったらさすがに生活基盤に直結するので絶対嫌なんですけど、その人との関係をもうなくしてもいいか、であったり。あるいは、なんか嫌なこと言われたら、「じゃあ〇〇さんに相談に乗ってもらうか」みたいなバッグがあるかな。そんなに喋ることにに対しては抵抗はないかな。

Cさんは、過去に家族にあたる人物にカミングアウトをした際、否定的な言葉をかけられ、かなりのショックを受けていたと語っていた。しかし、LGBTQ+のサークルの仲間や友人などにカミングアウトをした際は、受け入れてもらい、肯定的な反応をされた。また、そのようなカミングアウトをされ慣れていないような人からは、「今まで知らないうちに傷つけていたかもしれない」といった気遣いの言葉をもらったという。その経験を何度も重ね、この性自認が一時的な感情に基づいたものではないと気づくことができた。その後、否定的な反応をしてきた家族に対しては、これ以上理解してもらおうとは思わなくなった。

それからCさんは、髪型を短くした際に褒めてもらえたことなども加え、肯定してもらえた経験が自信と安心感に繋がっていたようで、カミングアウトに対する抵抗感が次第に薄らいでいった様子が読み取れる。さらには、Cさんは「女の子なんだから」という話し方をする人にははっきりと自分の意思を伝えようとするということもあるという。仮に上手くいかなくて

も、自分には他に話を聞いてくれる人の存在があるという安心感があるため、現在はカミングアウトや自己呈示に関してそこまで抵抗感は無いようだった。反対に、家族やどうしても上手く伝わらなかった人に対しては、「これ以上はやめておこう」と割り切っている傾向がうかがえる。これはCさんの家族に対する対応と同じく、理解されることが難しいと判断した場合、それ以上の説明を避けている傾向が見られる。

また、Aさんはカミングアウトについて、恐怖感や不安感があったものの、特にこれまで否定的なことを言われた経験が無く、受け入れてもらったことがほとんどだったと語った。Aさんはそのことについて、「周囲が音楽活動や服飾関係の人物など、様々な表現をすることを追及したり多様性を尊重したりするような人だったから」と語った。

筆者:カミングアウトする時に気を付けたこととか意識した言動とか、「これ言っていないのかな、どうなんだろう」みたいな葛藤はありましたか。

A:自分の場合は逆に言わないと苦しかったタイプですね。やっぱり何かしら（カミングアウトすべき）相手も大事な人ではありましたし。そういう人に伝えても大丈夫だろうなっていう自信まではいかないですけど、それだけ信頼してた人だったので、伝えられてそこは良かったなっていうのもありましたし。元々、（当時の）パートナーの方は服飾系の専門学校に通ってて、服飾系の専門学校の生徒さんって、結構性的マイノリティの方とかもやっぱり多いらしくて、だから、いろんな人がいるんですよ。要は、LGBTQ（+）の方もいるし、普通の男性・女性の方もいるし。やっぱりいろんな性自認とかセクシャリティとかあるけれども、デザイナーとしてデザインの美しさを求めてそこに通ってる方だと思うので、やっぱりそれで多様なその生徒さんに関わってたんじゃないかなって。

筆者:結構Xジェンダーって性同一性障害とかと比べたらあんまり普及してなくて、言葉も理解も乏しい人が多いみたいなものではあるんですけども、その当時のパートナーの方は比較的そういうのも元からわかってらっしゃる方だったんですかね。

A:そうですね。その関わってきた環境自体が、いろんな多様性が求められてた環境だったと思うので、そのおかげで（カミングアウトしたときも）あまり驚くっていうか、そうなんだねぐらいしか捉えてくれなかったっていうのが逆に良かったですね。

さらに、Aさんは現在音楽活動をしているが、同じ活動のメンバーにもカミングアウトをしており、家族では父親にカミングアウト済みだという。

A:この（音楽活動の）メンバーに対してもカムアウト（カミングアウト）はすで

にしたという状態です。で、結局皆さんアーティストなので、その部分は割とこう、すんなり受け入れてくれたというか、別にそういうのがあってもいいよねぐらいの、そういう軽い気持ちで受け入れてくれたのがありがたかったですね。（中略）

筆者:お父様も何か創作活動とか音楽活動されてたんですか？

A：そうですね。父も学生の頃はバンド組んでたりとか、なんかギターとかピアノとか弾いてたっていう話は聞いてたんで、ある意味では血は争えないんだなって思いました。（中略）あとは、父に関しては、いろんな子供を見る現場にいたんですよ。実は父は中学の教員をやってて、やっぱりいろんな生徒さんを見てきたりとか、いろんな生徒さんを持つ保護者の方を対応してきたりとかっていう経験が多分色々生きてきてるのかなっていうので、私がこういうアイデンティティであっても自分の子供であることは変わらないっていうのは、そういう風に捉えられてきたのかなって思いますね。

Aさんは自分が少数派だと気づいた際、恐怖感がつのったと語っていたが、カミングアウトをしないまま黙っているのもつらかったという。そんな中、葛藤しながらも実際にカミングアウトしてみると、肯定体験や安心感を得られたという。また、カミングアウトをした際の相手の反応について、軽い気持ちで受け入れてもらったことがありがたかったと語った。Aさんはこれまで主に、服飾系の専門学校に通っていた当時のパートナー、音楽活動の仲間、父親にカミングアウトをしているが、その相手側はどの人も多様性を尊重するような環境だったり、様々な表現方法を追求する人たちであったおかげで、自身の性自認や性的指向も抵抗なく受け入れてもらえたのだろうと振り返っていた。

また、別の日のインタビューでは当時のカミングアウトについて、Aさんはこう語った。

A：打ち明ける前の葛藤っていうのはあったんですけど。で、葛藤して、その上で自分がこうだってこう伝えていくうちに、なんというか、自分を再定義したような感覚ではありましたね。

Aさんはカミングアウトをし、自分のことを言語で表現していくうちに自分を再定義したような感覚だったと語った。

AさんもCさんも、初めはカミングアウトすることに抵抗感があったり、受け入れてもらえなかったときの恐怖や不安があったりしていたが、肯定体験を繰り返す度により安心感を得ていた。また、その際に受け入れてくれた人の存在や言葉が、「今後もし誰かに否定的な反応をされても、大丈夫だ」という自信にも繋がっていた。そして自身を言語化して説明する過程をすることで、自分を見つめ直す重要な機会にもなっているのだとうかがえる。

2. 同じ境遇の人々との関わり

本項では、対象者が同じXジェンダー当事者たちと関わってきた中で得られた効果について論じる。ここでは主にBさんとCさんの事例を取り上げる。

Bさんは、自身をXジェンダーと確信したのは当会員制サークルに所属し、Xジェンダー当事者と関わった後だと語った。

筆者:Xジェンダーだって確信した瞬間とかって覚えてますか。

B：そうですね、確信みたいなのはもう（当会員制サークルに）入った後だったかなと思います。最初まだわからないけど……みたいな感じで入会したんですよ。っていうのも、なんかやっぱりXジェンダーって、なんか最初に送ってくれたやつ（インタビュー前に筆者が送った先行研究をまとめた資料）にも書いてあったかもしれないですけど、「なんちゃって」みたいに言われがちじゃないですか。（中略）自分は（性別の）違和感もそこまでないし、そこまで苦勞してないみたいな。多分、LGBT（Q+）関係のコミュニティの中では結構ある話かと思うんですけど、結局、苦勞大会みたいになっちゃってる部分があって、誰が1番苦勞してるかみたいな。（中略）やっぱり自分は法律的にも異性の人と結婚もしてるし、アメリカだとまだちょっと同性婚ができるのでちょっと気楽なんですけど、日本のだと同棲とかもできなかったりとかで、そんな立場のあんまり苦勞もしてない自分がXジェンダーって名乗るのは逆にどうなの、みたいなのがあったりとかして。（中略）パートナーがいて、しかも子供までいる人が性的マイノリティってどうなの。みたいな、結構言われたりするんですけど、そういうのがあって、あまりそういうこと言っただけじゃないんじゃないかと思ってたので、一応思うだけにしておいたんです。でもやっぱり、1人でうだうだ悩んでも、みたいな感じで、（当会員制サークルに）入会しようかな、どうしようかなって思った。やっぱり、トランスジェンダーのコミュニティの中でも序列ができちゃって、手術をした人の方がより本当のトランスジェンダーみたいな、そういう価値観が出たりしてる中で、じゃあそういう意味では本物じゃないみたいな言い方をされちゃったり、こっちは苦勞してるんだみたいなことを実際にそのトランス女性から言われたことがあって、それは結構自分のにショックだったな。今考えると、やっぱりその自分のアイデンティティが、結局Xジェンダーとかノンバイナリーじゃないものなんじゃないかって思っていた時にその否定をされたのがショックで、結構それで傷ついてしまって、あんまりそういうこと（自身を性的マイノリティ当事者であること）を言わなくなって。やっぱり、Xジェンダーなんていうのはおこがましいだろうみたいなこと長いこと思ったんですけど、このサークルに入って、「やっぱりそれ（Bさんがトランスジェンダーのコミュニティと関わりがあった時に言われたこと）は差別的ですよ」って（中略）

（当会員制サークルの仲間が）しっかり言ってくれたことがあって、それで自分的にはちょっと救われたっていうか。それで、（当会員制サークルに）入って、それで自分やっぱりXジェンダーじゃないやってなったらそれはそれでいいと思ったんですけど、入ってみて、いろんな他の当事者の人たちとか、あと他にもノンバイナリーのコミュニティとかも入ったりして喋ってるうちに、徐々に確信に変わっていったみたいな感じですかね。「もう、自分絶対そうじゃん」みたいな感じ。

筆者:入会後にいろんな方のお話を聞けたことが大きかったですか。

B：そうですね、なんか、こんなに（自分の）話が伝わる人がいっぱいいるんだみたいな感じでしたね。

Bさんは、Xジェンダーあるいはノンバイナリーなども含め、自身が性的マイノリティ当事者であると名乗ることに抵抗感があった。その理由としては、トランスジェンダーと比べるとそこまで性別違和があるわけではないこと、結婚をしていることから、あまり苦労していない自分がその当事者を名乗るのはおこがましいと考えていたからとのことだった。そして、周囲から「苦労してないくせに」といった言葉をかけられるかもしれないことに恐怖を抱いていたこともあり、自分の中で抑圧しようとしていたという。また、以前までトランスジェンダーのコミュニティとも関わりがあったBさんは、そのコミュニティの中で存在していた、「手術をしている人が偉い」という序列と、「より苦労している人が『本物』である」というような風潮が、Bさんの中での性別違和の抑圧を加速させていた。さらには、そんな中、トランスジェンダー当事者から「『本物』じゃない」といった性自認を否定するような言葉を受けてしまったという。一人で悩んだ末、試しに当会員制サークルに所属してみることと決めた。そこで、自分の性自認について知見を広げ、改めて向き合おうとした。すると、BさんはそこでXジェンダー当事者の話を聞くことによって、「自分と同じような感覚や体験を持つ人がここにはいたんだ」と思えたという。また、過去に言われた否定的な言葉に傷ついたことについて共感してもらえたことも、Bさんにとって救われた経験だったと語った。

一方Cさんは、カミングアウトをすることよりも、同じ境遇の人たちと関わることの方がより自分に対する解像度が上がると考えており、当事者同士の共感が本人にとって重要だったのではないかと語った。

筆者:（中略）（様々な人々とのやり取りやカミングアウトが）自分に対するXジェンダーの理解度とか解像度が高まったきっかけの1つとも捉えられますか。

C：そうやな。カミングアウトよりも、かなり近い境遇の方々と喋っていると、自分のジェンダーとしての解像度が上がってくるな。（中略）誰が何を喋っていたのか、うちはちょっとあんまり覚えてないけど、自分が喋ったことに対して、自分も

そう思うとか、あるいは共感できる、とか言葉を代弁してくれた感じがする。（中略）例えば、洗濯物の洗剤の話があって、最近あったのが、その洗濯物の洗剤の使い方があんまりよくわからないって言っていた方がいて、で、その方がたまたま外見上男性と判断される方で、「男の子やからそれ（洗剤の使い方）がわからへんのよね」って言われた際に、ちょっとすごくひっかかったっていう話を聞いた際に、「その人がたまたま洗濯の洗剤の使い方を知らへんだけなのにわざわざ性別を結びつけるよな」って言ったら、「それなんだよ」って言われた。

他の当事者の話を聞くことが、自身の言いたいことや思っていることを代弁してもらえている感覚があるという。また、以前あったやりとりのエピソードでは、逆に自分が共感する側になったこともあったと語った。Cさんの知人が、「男の子だから洗剤の使い方がわからないんだね」と言われたことについて苛立ちを覚えており、Cさんもそれに対して、一見関係の無いことをわざわざ性別に結び付けることはおかしいのでは、と共感を返した。

武内（2016）によれば、当事者はXジェンダーというカテゴリーを得ることが集団に属することを可能にしているという。加えて、BさんとCさんの語りから、集団に属して共感を得たり、返したりするやりとりが、当事者たちにとって安心感を得られる重要な要素であり、自分に対する理解度や解像度が上がるきっかけの一つでもあるといえる。また、Bさんのように、自身の性自認について確信を持つ前でも、自分を知るために集団に属するという行動も、自己定義に至るまでに必要な行動だと考えられる。

3. 自己分析の繰り返し

本節では、Dさんの事例を通して、当事者の自己分析を繰り返すという実践について論じる。第2節でDさんは、新たな概念やカテゴリーを知ることにより揺らぎが生じていると語っており、今でも時折迷いながら性的マイノリティや自分について学びを深めているという。

筆者:これ（Xジェンダーという性自認）ってもしかして自分の思い込みかな、ってというような感覚って、今までありましたか。

D：ありましたね、しょっちゅう。多分10年間のほとんどはそうだった気がする。それで、こう、1回立ち止まって、もう1回みたいなの、繰り返しだったような気がします。

筆者:思い込みかもって思って、また調べて、「これかも」、「やっぱりでも（違うか）」……で調べてくの繰り返しですか。

D：ですね、もうここ最近はもう用語増えてきてるんで、その傾向が強くなっちゃってるっていうか、もう当てはめるとキリないなってとこまで来ちゃって。自

分でも結構LGBTQ（+）関連について知ってる方だと自分でも思ってたんですけども、そんなのがあったんだみたいな。（中略）

Dさんはこれまで、たくさんの性的マイノリティカテゴリーについて調べており、自分でも詳しい方だと思っていたが、新しい用語やカテゴリーを知る度に自分を見つめ直し、分析して、やはり違うかも、という過程を繰り返してきた。今でも迷いが生じることはあるようで、その都度概念やカテゴリーについて調べ、検討している様子だった。また、インタビューの際、性的マイノリティのカテゴリーについて調べる際、Dさんがよく目にしていたサイトなどを共有してもらい、私も閲覧した。これまで全く見聞きしたことのない概念やカテゴリーがまだまだたくさん存在しており、これからきっと新しい概念や枠組みは登場し続けるだろうと話していた。

このように、Dさんは今でも自分を見つめ直し、再定義する過程を繰り返していることがわかった。第二節で述べたように、世間の目や周囲の影響を受けたことによる迷いで、性自認に対する疑問点を認識し、その都度調べるという実践が見られた。新しい概念の登場でカテゴリーの枠組みが増え、混乱してしまうことは課題点の一つとも言えるが、Dさんのように繰り返し自己分析を行うことや調べることは視野と知見が広がることにも繋がるのだろうと考えられる。そこで次項では、あえて自分を一つのカテゴリーに定義せず、様々な場面に応じて使い分けている事例を取り上げる。

4. カテゴリーの使い方

本項では、あえて自分を一つのカテゴリーに定めていないというCさんの事例を取り上げる。第二節で新しい概念の登場について「純粋に面白いと思う」と語ったCさんは、自己のあり方に必ずしも言葉や定義をつけなくても良いのではないかと語った。

C：うちも結局セクシュアリティ、4回か5回ぐらい変えてるからな

筆者:あ、そうなんですか。

C：そうそう。人に説明する言葉としてセクシャリティ名を使うけど、「別にあの人に伝える必要がない」と思ったときとか、あるいは、別に人に伝えんくっても、自分の中でなんとなく自分のアイデンティティがわかるのであれば、言葉というものでそんなにセクシャリティに定義付けなくてもいいのかなって思ってる。ある方が話してた話で、その方は一応概念上はゲイに入るんやけど、ゲイに付随した諸々のレッテルがあるからゲイを使いたくないって言ってたんですよ。なんか言葉に縛られる力があるからゲイという言葉を使いたくないという。

確かに自分もトランスジェンダーっていう言葉を使う際に、自分の性別と自分の身体的性別とジェンダーアイデンティティが違うんだっていう説明が付随するわけで

あって。それを名前をつけることによって確定させるような感覚や、自分のアイデンティティを自分に決めつけるような感覚に対して、もうちょっと自分のアイデンティティってどうなんだろうって悩んでもいい時期があるんじゃないかって思って。トランスジェンダーであるっていうことを名乗るのには、いくらか時間をかけましたね。

Cさんは、必ずしも一つの言葉やカテゴリーで自分を定義づける必要は無いのではないかと考えているようだった。Cさんが概念上ゲイに入るという知人から聞いた話だと、ゲイという概念や言葉が持つレッテルがあるからという理由で自身のことをゲイと名乗ることを避けているという。Cさんも同様に、トランスジェンダーが自分にとってしっくりくる概念・言葉であることはわかっているものの、そこで自分のジェンダーアイデンティティを簡単に決めつける前に、あえて迷ってみてもいい時期というのがあるのではないかと考えていた。概念の存在とそこに属することが、自分を見つけるために迷っている当事者の救済になっている場合もあれば、枠組みに自分のあり方をあてはめることによって、逆にアイデンティティが言葉によって縛られる場合もありうるという。

また、Cさんはこれまで、自分のセクシュアリティのカテゴリーを4回ほど変えてきたとのことだった。大きく分けて、初めはバイセクシャル、次にXジェンダー→ノンバイナリー→トランスジェンダーと自身の用いるカテゴリーを変更しながら生きてきたという。

C：（バイセクシャル自認の後にXジェンダーを知り、）Xジェンダーの方が近いと思って一旦Xジェンダーを使います。で、Xジェンダーの中でも、無性、中性、両性、不定性って色々あるじゃないですか。それをいちいち説明するのめんどくさいなって思ってきたから、男性女性どちらにも当てはまらないっていう意味合いのノンバイナリーの方が（説明の時に）便宜上いいなって思って、ノンバイナリーにしたんです。で、ノンバイナリーだと、その身体的な性別違和があんまり強く伝えられないって思って、トランスジェンダーに名前を変更してますね。

Cさんは最初、自分はバイセクシャルではと自認したが、バイセクシャルは性的指向を示すカテゴリーであることから、性自認を示すXジェンダーに出会い、自分をよりの確に表す概念を知った。しかし、説明の際にXジェンダーは困難を感じたことから、ノンバイナリーという言い方で自分を伝えるようになった。さらに、それだと自分の性別違和のことを上手く言い当てられないと感じたCさんは、最終的にトランスジェンダーとして自分を伝えるようになったと語った。

筆者:Xジェンダーと名乗ることに対してそこまでこだわりはあまり無いんですか。

C：そうですね。なんかむしろトランスジェンダーの方が今の自分にしっくりくる

んですけど、このサークルに所属してXジェンダーって名乗ってるのは、Xジェンダーって名乗ることによって、性別違和の近いXジェンダーの方に出会える確率が高くなるんですよ。いわゆる情報収集においてXジェンダーを名乗る必要性が自分では出てる。（中略）自分はトランスジェンダーの方がじっくりくるんですけど、セクシュアリティが完全に男性にパスしてるわけじゃないから、ここの団体の人たちとコミュニケーション取ってる方が、自分にとって似た境遇の方が身近にいらっしゃるなって感じます。

Cさんは現在、自認自体はトランスジェンダーの方が近い感覚であるとのことだが、Xジェンダーと名乗っているのは、この会員制サークルに所属した方が、「完全に男性にパスしたわけではない」ような、自分とより近い境遇の人と出会うことができると考えたからという。

他の三人の対象者がXジェンダーや主に一つのカテゴリーで自分を示していたのに対し、Cさんは様々なカテゴリーを場面に応じて使い分けている印象があった。これは、ノンバイナリーでトランスジェンダーを自認しているエリス・ヤング（2019:125）が状況によって複数の性的マイノリティカテゴリーを使いわけて自己呈示している実践と同じ試みと言える。そしてその一方で、カテゴリーや言語が持つ効力として当事者を縛ることもある側面も見えた。多くのカテゴリーを経ることも、自己理解の過程において大きな影響を及ぼすといえ、必ずしも一つのカテゴリーに留まる必要も無いのだと考えられる。

第4章 結論

本稿では、4名のXジェンダー当事者の語りから、本人がXジェンダーに出会った経緯から、自己定義や自己理解に至る過程における葛藤、そして今の自分ができるまでのきっかけを探った。本章では、結果と先行研究との関連性をまとめ、結論を述べていく。

従来、セクシャルマイノリティは大きく四つの枠で区分されており、LGBTと総称されてきた。そんな中、近年そこに追加されたのが“Q”と“+”と呼ばれる男女二元論に基づかない性自認や性的指向を示すカテゴリーで、新たに“LGBTQ+”と呼ばれるようになった。本研究のテーマでもあるXジェンダーはこの“+”の枠に当てはまるカテゴリーと言われ、曖昧な性自認を指している。そのため、当事者が曖昧な性別違和を自覚するまでには特に時間を要するとし、本稿では男女別の一人称を使うことに躊躇いがあったことや、成長するにつれて周囲の振る舞いや反応で男女の違いが顕著に表れたことに対する困惑、自身の好みが「男らしくない/女らしくない」ことへの気づきなどが、当事者の中で違和感となって積み重なってきたことが示された。また、それによってもたらされる精神的疲労や疑問が潜在的にストレスとなって表れ始める苦悩も見られた。

また、Xジェンダーは日本独自の言葉で知名度が低いことに加え、医療的なガイドラインが存在しないため、Xジェンダーと自分を断定するには自分の意思が大きく関係していると

言われている (label X 2016:22)。その分、他者からの理解や認知を得られることが難しく、周囲の声や反応による影響で、自身の性自認やそれに関する考え方が大きく変化する可能性も考えられる。自身の感覚や生活の中で抱えてきた違和感の正体が、Xジェンダーというカテゴリーを通して自分が少数派であると可視化されたことによって、自分の属性を知った利点がある反面、自身がマイノリティ側の人間であることに動揺し、不安を抱える事例があった。また、本人の恋愛関係や婚姻関係の状況を軸にして性的指向だけでなく性自認までも決めつけて解釈してしまう周囲の声を受けたことや、様々な性別の人と交際経験があることから、自身のセクシャリティが結局何なのかという迷いに至るケースが見られた。また、トランスジェンダーや性同一性障害ほどの性別違和を持ち合わせているわけではないがために「苦労してないくせに」というレッテルを貼られたことや、曖昧な性自認故に理解が得られず、「勘違いではないか」などと当事者の認識を否定するような反応を返されたこと、そして周囲からの期待や価値観の押しつけにより、自己呈示を避ける試みや、自身の性別違和を抑圧していた傾向も見られた。さらには、Xジェンダーの他にも、曖昧な性自認や性的指向を表す概念やカテゴリーの登場により、性的マイノリティカテゴリーの中でもより多くの区分が存在することになり、最終的に自分が当てはまるカテゴリーが何か、当事者が混乱してしまう現状もあることがわかった。

これらのような迷いや動揺、不安を持ちながら、当事者たちは自己呈示をした相手からの肯定的な反応や、同じ境遇の人々との関わりで得られた共感を重ねながら、自分と向き合ってきた。また、中には自身を性的マイノリティ当事者かどうか判断するために、当会員制サークルに所属した者もあり、自身の性自認について確信を持つ前でも、自分を知るために集団に属するという行動も、自己定義に至るまでに必要な行動だと考えられる。当事者たちが所属する当会員制サークルも、このような体験を積み重ねるために重要な機能を持ち合わせているといえる。また、自身を取り巻く環境の変化などによってセクシャリティについて迷う度に、性的マイノリティについて調べ、自己分析を繰り返すという実践も見られた。そして、エリス・ヤング (2019:125) と同じように、場面や状況によって複数のカテゴリーを使い分けている当事者がいたことから、一つのカテゴリーに留まる必要性が必ずしもあるわけではないことも考えられる。

次に、本研究を通して見えた限界と今後の課題についてまとめていく。本稿では、曖昧な性自認であることから、Xジェンダー当事者は性別違和に確信を持つまでに多くの時間を要すると考えられたが、それまでの過程における当事者たちが抱える精神的疲労や苦難は計り知れないこともうかがえる。しかし、少数の事例に基づいた研究であることから、Xジェンダー当事者の実態についてより多くの事例が必要であったといえる。また、Xジェンダーを含める曖昧な性自認・性的指向を表す概念やカテゴリーが、当事者の居場所や自己のあり方を示す利点があることに対し、多くの枠があることで混乱をもたらすことや、言語によって当事者を縛ることもあるという負の側面も見られた。カテゴリーが持つ効力や機能が与える影響や摩擦について、さらに検討する必要があると思われる。これらを今後の課題とした。

謝辞

本卒業課題研究を行うにあたり、ご協力いただきました皆様には厚く御礼申し上げます。ご多忙にも関わらず、快く調査にご協力いただいた当会員制サークルの4名の方々と、インタビュー調査への参加者を集めてくださった当会員制サークルの代表である藤原様に感謝申し上げます。貴重なご機会をいただき、誠にありがとうございました。

最後に、本研究の執筆にあたり、お忙しい中ご丁寧な指導をしてくださった泉啓先生に感謝いたします。おかげさまで、無事に本研究を形にすることができました。誠にありがとうございました。

【参考文献】

- 小野彩水（2022）「『ノンバイナリーがわかる本』 翻訳を通じた日本へのノンバイナリー概念の導入」『ジェンダー&セクシュアリティ』19,124-125.
- 厚生労働省（2020）「Ⅱ．職場と性的指向・性自認をめぐる現状」
(<https://www.mhlw.go.jp/content/000625158.pdf>,2024/11/27) .
- 武内今日子（2016）「多形的な「私」の承認をめぐる—X ジェンダーの語りから—」
- 武内今日子（2021）「『Xジェンダーであること』の自己呈示—親とパートナーへのカムフラウトをめぐる語りから」『ジェンダー研究:お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報』24,95-112
- 中日新聞（2021）「宇多田ヒカルは男性？女性？『私はノンバイナリー』告白に共感相次ぐ『ミステリーウタダ』新敬称も提案」 (<https://www.chunichi.co.jp/article/280737>,2024.12.6).
- 鶴田幸恵（2009）『性同一性障害のエスノグラフィー—性現象の社会学—』ハーベスト社、178-185.
- 東京大学（2024）「東京大学における性的指向と性自認の多様性に関する学生のための行動ガイドライン」(<https://www.u-tokyo.ac.jp/content/400232573.pdf>,2024.11.16).
- 針間克己（2016）「Xジェンダー・精神科医の立場から」Label X『Xジェンダーって何？』緑風 出版,94-102.
- 平森大規、釜野さおり、小山泰代（2022）「性的指向と性自認のあり方（SOGI）と家族研究 —量的調査を通じた試み—」『家族研究年報』48,5-25.
- 松嶋淑恵(2012)「性別違和をもつ人々の実態調査:経済状況、人間関係、精神的問題について」『人間科学研究』34,185-208.
- 松本洋輔（2021）「セクシュアルマイノリティとメンタルヘルス」『心身医学』61(7),599-607.
- 宮崎あゆみ（2016）「日本の中学生のジェンダー—人称を巡るメタ語用的解釈—変容するジェンダー言語イデオロギー」『社会言語科学』19(1),135-150.
- 山田苑幹（2019）「Xジェンダーを生きる——男女のいずれかというわけではない性自認を

- もつ人々の語りから」『質的心理研究』18（1）,144-160.
- 渡辺隆行（2021）「男女どちらかに規定されないXジェンダーの多様な性自認に起因する被服体験の質的分析」『繊維製品消費科学』63(1),35-49.
- Eris Young（2019）THEY/THEM/THEIR:A Guide to Nonbinary and Genderqueer Identities,（=2021,上田勢子訳『ノンバイナリーがわかる本 heでもsheでもない、theyたちのこと』明石書店,22-125.）
- label X（2013）「Xジェンダーとは」（<https://ftxmtx-x-gender.com/xgender/>,2024.11.10）.
- label X（2016）『Xジェンダーって何？』緑風出版,28-204.